

<b>Title</b>	ビザンツ、ロシアの都市史と市民社会
<b>Author(s)</b>	飯島, 康夫
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.20,2001.3 : 253-317
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3552">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3552</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## ビザンツ、ロシアの都市史と市民社会

飯島康夫

### 一 はじめに

ロシアの都市化は、歴史的にどんな特徴があるのだろうか。ビザンツとロシアの都市形成は、文化的なつながりを持っているのだろうか。ロシアの都市形成は、西欧の都市形成とどのように違っているのだろうか。ロシアはソ連邦崩壊後、市場経済への移行を目指ようになったが、このことは都市空間にはどのように現れているのだろうか。

本稿は、以上のような問いに答えるために、主としてロシアと西欧の都市・地域形成の違いを念頭に置き都市・地域発展の歴史を概観することを目的とするものである。この論文は、東欧社会の成り立ちとビザンツ帝国との関わりから始め、これらの歴史的な経緯を踏まえたうえで、ロシアの都市・地域形成の特徴を考察していく。

## 二 東欧社会の起源とビザンツ帝国

### 1 東欧ビザンツ文化圏の成立と背景

東欧社会の起源は、第二次世界大戦後の共産主義政権の成立によってつくられたということが一般的な理解かもしれない。しかし、ここでは古代ローマ帝国時代にまでさかのぼりその起源を探る。以下の諸点は東欧社会成立のきっかけとなった背景と考えられる。

第一に、アレクサンダー大王時代に栄華を極めたマケドニアが、紀元前一四六年にローマ帝国の属州に編入されると、ギリシャ諸都市がローマの版図の中に組み入れられ、アテネ、コリント、ビザンティオンなどのギリシャ系住民が「グレコローマ人」としてビザンツ人の原型、ひいては東欧人の原型として呼ばれるようになった。<sup>①</sup>トラヤヌス帝の頃、ローマ帝国の領土は最大となつて、現在のルーマニアのトランシルヴァニア地方をはじめ、黒海沿岸地域は属州として組み入れられたばかりでなく、ローマ式法制度が施行され、ラテン系入植者も増えた。<sup>②</sup>

第二に、ローマ帝国の東西分治である。三世紀末、軍人出身のディオクレティアヌス帝は、ローマ帝国の四分統治をはじめ、東西のローマ帝国にそれぞれ正帝二人と副帝二人に統治を委ねるようになった。その後、三九五年には、テオドシウス一世の死後、その子アルカディウス、ホノリウスにそれぞれ東西分治させる体制をとる行政慣行が定着した。以後、一人の皇帝が東西を統一的に統治することはなくなつたが、東西のローマ帝国は、ひとつの帝国として一体性を保持しながらそれぞれ別々の発展の道をたどることになった。さらに四七六年に西ローマ帝国が滅亡すると、東のロー

マ帝国と西のゲルマン社会との分化が一層鮮明となった。東ローマ帝国は、こうしてビザンツ帝国として西ヨーロッパのゲルマン社会とは異なる独自の発展を遂げるようになった。<sup>③</sup> コンスタンティヌス帝の時代に、首都がギリシャ人の植民都市ビザンティウム（ビザンティオン）に置かれ、後のコンスタンティノープルは名実ともに「第二のローマ」となった。中世初期には、このコンスタンティノープルは、古代ローマ市民の末裔を自他ともに認める中世ローマ帝国の都市として文化面などで中世西ヨーロッパ都市に先んじていた。<sup>④</sup>

第三に、東西ヨーロッパを分け東方正教会文化圏と西方カトリック文化圏とを分かつ契機となったものに、皇帝教皇主義があげられる。三一三年のコンスタンティヌス帝のキリスト教公認令以降、キリスト教ローマ帝国が誕生した。それと同時に教会と国家の関係は変化した。教会は国家の一機関に変わりはじめたのである。教会法規はコンスタンティノープル総主教が複数の候補者から選挙されることを定めていたが、実際には皇帝の意になつた候補者が選出されるようになった。この頃から、精神的・宗教的な使命を帯びたビザンツ皇帝を中心とする華夷秩序のようなものが形成されるようになったという。皇帝を聖俗の両権威を兼ね備える神人的な存在（家父長）とし、周辺諸民族、諸国家の君主たちをその兄弟、子供、友人などとするビザンツ様式の同心円型華夷思想である。これは一種、中国の華夷秩序にも似た擬制的な親族秩序であつた。東方教会では、地上の世界帝国であるビザンツの皇帝が、天上の全能者から神聖な支配権力をサクラメント（秘蹟）を通して神秘的に委譲される存在であつた。<sup>⑤</sup> デイオクレティアヌス帝の頃、皇帝権は聖職とならんで神の最大の賜物であるという王権神授説が流布され、東洋的な皇帝支配を正当化するようになった。キリスト教ローマ帝国の皇帝は、この世の唯一の支配者として天から恩恵を受け、神の人類救済計画にあずかる天の国を、不完全ながらも写しとつた地上の国の支配者として君臨するものと考えられるようになった。ビザンツ帝国は、少なくとも形式のうえでは、神人が世俗世界をも統治するという神権政体であつた。つまり、ビザンツ皇帝は、天上の全能なる神の相似的なイメージを写しとり、地上で唯一の全能なる皇帝として、この世の一切の事柄、すなわち、世俗と精神的

な事柄を決定する最終的な権限をもつ存在であると考えられるようになった。一方、一般民衆は、ビザンツ帝国において天上の階層秩序の世俗的な模写である皇帝とそれを取り巻く皇帝役人の世俗的な階層によつて、統治されるべき対象となつた。帝国の文化圏外にいる蛮人は、世界をあまねく統治すべき皇帝の威厳のもとに、いずれは服する存在であつて、神の人類救済計画に取り込まれるものと考えられた。このように、ビザンツ皇帝は、世界をあまねく包括統治するという世俗的な支配権と、布教によつて世界をキリストに返すという宗教的な使命という、二重の使命をあわせもつていた。

これはビザンツ文化の後継者、ロシア帝国にもみられるのではないだろうか。最後のロシア帝国皇帝ニコライ二世は議会に対して不信の目を持つて接していた。彼の見方によれば、「ツァーリは家父長であり、神のように自分たちのことを助け、守ってくれるはずだ」という民衆の救世主願望に応える使命を持つた存在であつたのだ。ニコライ二世は、ロシアはビザンツ・キリスト教の精神文化の系譜を受けたものとして、西欧の退廃した文明と対峙して、全人類を救済する使命があると、考えていたかもしれない。つまり、このように、ロシア帝国の皇帝のケースでも、神の意思と加護によつて帝国と民衆を導く使命が授けられていると考えられていたのである。世俗の事柄は神の摂理によつて生起するのであり、議会の多数決など人間の小賢しい意志や力では神の摂理や計画に抗うことはできないと考えていたかもしれない。このことははっきりとした政教分離の考え方もつ西ヨーロッパとは異なるものである。

第四に、ビザンツ帝国は、西ヨーロッパ社会と比べてタテ社会の傾向が強かつた。したがつて、西ヨーロッパのギルド、ツunftのような手工業者、商人たちのヨコのつながりがあまりなかつたといえる。手工業者や商人たちは、権力側とむすびつくことによつて自分たちの利益を保護してもらふような存在だったのであり、お互いのむすびつきを強化して自らの主張を堂々と行うようなこともあまりなかつた。ビザンツ帝国の封建制は、軍事奉仕の義務を帯びた特別の法的土地所有形態を持つており、古代社会のライトウルギー国家にも類似した点を持つていた。つまり、古代ローマ帝

国から世界帝国の理念を継承し、皇帝権力と大土地所有者が支配する社会の形態を受け継いでいたといえるのではないだろうか。

## 2 西欧とロシアの市民社会

では、ビザンツから精神文化を受け継いだロシアでは、なぜ市民意識が根づかなかつたのだろうか。

第一に、帝政ロシアでは、ビザンツのように、商人や職人は、政治権力に強く依存し、西欧中世のように、兄弟的な誓約団体として固有の自主的団体・結社をつくることはあまりなかつた。例えば、陸路による隊商貿易は外敵から商品を守るために武装する必要があつた。そして、国家の軍隊がこのような国際交易を守つたのである。ロシアの遠隔地商人は皇帝の保護民であつた。ロシアでは、十八世紀においても、国家が中国との貿易で「帝室隊商」として国境交易を管理し、特にゴスチと呼ばれる政商が君主や官僚など支配者層と密接にかかわつていたという。これは西欧中世の遠隔地商人が比較的、自立的な貿易を振興し、都市の市民社会を築くうえで基礎をつくつたことと対照的である<sup>⑧</sup>。外国から輸入する第一級の商品はまず、皇帝に差し出された。皇帝は、クロテンの毛皮や塩など、利益の上がる輸出品生産に対して独占権を持ち、政商としてのゴスチが、皇帝の代理人として有力商品の貿易独占の管理にあたつていた。このようにロシアの商人は支配者層と政治的にむすびつき、なかには貿易の庇護を受けていた者たちも多かつた。取り扱う交易商品の品目も高級品の毛皮、蜂蜜などを輸出し高価な織物金属製品という奢侈品が多く、政治権力とのかかわりがここにも現れていた。

第二に、交易には、皇帝、貴族から農民に至るまで、社会のすべての階層が参加しており、商人固有の意識形成は未熟であつたといわなければならない<sup>⑨</sup>。手工業者、小商人は常に都市と農村の間を往来し、西欧のように農村から逃れて

きて市壁内に一定期間、居住すれば、自由民となるような都市と農村の法的な分化をみることはなかったといえよう。<sup>⑩</sup>帝政ロシアの都市の見慣れた風景の一つは、農村から都市に出かけてきた農民が無数の露店を出し商売にいそしむという、一種、回教国のバザールにも似たものであった。ここでは、都市は、単に周辺の農村領域の中心にすぎず、都市に居住することは、法的に自由民としての権利を付与するものではなかったのである。<sup>⑪</sup>

### 三 ビザンツの都市とロシア・東欧

#### 1 ビザンツとロシア東欧の関わりについて

ビザンツ帝国とロシアが、直接に都市形成等の面で影響を受けていたという根拠を文献で見出すことは容易ではない。しかし、一定の精神文化の交流があった以上、この問題について探求することは重要であろう。

キエフとコンスタンティノープルは、大公の息子の時代に、既に通商関係がうかがえる。ロシアから奴隸、毛皮、蜂蜜などを輸出し、ビザンツからは繊維、貴金属、陶器、オリーブ油、ブドウ酒、果物などを輸入していた。また、ロシア各地の聖堂の建築材料や聖像もビザンツから輸入されていたことがわかっている。このような通商関係とともに、聖職者などの交流があり、ビザンツからは、聖堂建設において、建築技師が、また、イコンなど聖像画家が、ロシアに派遣されていたことも判明している。コンスタンティノープルの居住区には、ロシア人が居住し、修道士や巡礼者などがビザンツ帝国の傭兵として移り住んでいたという。<sup>⑫</sup>しかし、具体的にどのような影響を受けていたかをこの限られた本稿のなかで解明することはできない。ただ、概説として、ロシアやブルガリアなどのビザンツ文化圏に属する都市・地

域がビザンツ帝国の文化を取り入れていたこと、そして、そのなかに都市の形成においても倣うところがあったのでないかと、ここでは推論するのみである。

## 2 ビザンツ都市の特徴

元来、ヨーロッパという言葉は、単に西欧カトリック世界のみならず、東方のギリシャ正教世界をも含むものであった。<sup>13</sup> さて、ビザンツの都市は、どのような特徴をもっていたのであろうか。

第一に、ビザンツ都市において、国家介入の度合いが、西欧ヨーロッパ都市に比べて、相対的に強かったことが挙げられる。東西ヨーロッパの統一体としての古代ローマ帝国が衰微していくなかで、東半分にあたるビザンツ帝国都市はローマ帝国属州の細分化の結果、国家行政の緊密な管理網の中に取り込まれることになった。都市の有力者は、官僚機構の上層を占める高級官僚や大土地所有者であった。<sup>14</sup>

第二に、皇帝が教会事項に絶対的な権限を持っていたために、西ヨーロッパのように司教が地方の封建領主となる司教都市という街は発展しなかった。ビザンツでは、司教は皇帝が自由に任免できる皇帝役人の一人にすぎない存在であった。確かに、四五一年カルケドン宗教会議で、都市は、司教教会の所在地と定められ、都市と大聖堂が不可分のものと捉えられたことはあったが、西欧との比較において封建領主の都市として自律的に発展することはなかったのである。<sup>15</sup>

第三に、経済や社会生活の面においてコンスタンティノープルが最重要の都市として属州諸都市がこれに連なるといふ、相対的に首都突出型の都市システムを持っていた。<sup>16</sup> 属州都市の住民は軍隊の駐屯兵、地方役人、聖職者、手工業者などから構成されていたといふ。<sup>17</sup>



第四に、七世紀以降、蛮族（ベルシャ人、アラブ人、アヴァール人など）の侵入に対応して、都市が積極的に城塞化をすすめ、軍事防衛上、平坦地から近隣の山頂に都市を移転したり、岬や沿岸島嶼部にコンスタンティノープルのような岬型城砦あるいは海岸型城砦を築いた。なかでも、コンスタンティノープルは、難攻不落といわれた大城壁を築き、異民族の襲撃にもよく耐えた。これらの軍事都市は、海上からの攻撃を撃退し、後背地からの攻撃を険しい丘陵地帯という地形によって街を守るといった特徴を持っていた。<sup>18</sup>人々は山頂の城砦に群がって住むようになり、また、都市の城塞化によって経済は自給自足を余儀なくされていった。こうして、次第に商人や手工業者は少なくなっていた。ビザンツ中期の都市はまさに城塞都市（カストロン）であって、平時には守備隊とその家族が居住し、戦時には周辺住民の避難所となっていた。農民は、城壁外に容易に待避できる範囲内で土地を耕し、個人または農村共同体を通じて帝国の役人に租税を支払っていた。つまり、市壁の外には、職人や商人、農民が住み、市内は一般民衆にとつて臨時の避難場所ではなかった。こうしてビザンツ都市は、周辺地域と一体となつて単一の社会・経済単位を構成していたといえる。

そればかりではなく、異民族侵入の危険に対して行政組織の軍事化が図られ、軍司令官は強力な権限をもつテーマ制（軍政管区制）をはじめまるにおよび、都市の自治は、次第に縮小するようになっていった。国境地帯には、純粹に国境要塞の性格を持つ砦の街が築かれ、これが小軍管区をかたちづくるようになっていった。<sup>19</sup>七世紀以降、テーマ制によって、軍事と行政両面の実権を握る軍人が、事実上、各地方を統治するようになった。軍人は兵役に就くという条件で国境近くに土地を与えられ、国境警備にあたる地方駐屯軍を編成し地方都市で幅をきかせていた。軍人は、いわゆる屯田兵として、土地を耕すとともに非常事態の場合にはいつでも武装し、必要とあれば戦場に馳せ参じた。

第五に、中期ビザンツ帝国は、西ヨーロッパ社会と比べても軍事化された社会であった。各種資源が戦争目的のために使われ、平時の商業活動に利用する人的資源と資材は少なかった。異民族侵入という危機の時期には、国境取引などの通商活動は国家の厳密な管理の下に置かれ、関税徴収のための役人たちが主要な都市に配置されていた。<sup>20</sup>このため、

地方の属州都市では、西ヨーロッパ中世都市のように、都市への特権付与と自治権獲得のための推進力となるような商人や手工業者層を見出すことはできない。これは上述の国家による商業支配と密接な関わりをもっているといえるだろう。<sup>21)</sup>

第六に、一二〇四年の十字軍によるコンスタンティノープル占領以降のビザンツ帝国後期に、ビザンツ都市は、地方への権力の分散という傾向を示すようになった。帝国末期には、中央権力の弱体化を反映して、首屈的な機能を果たすような地方都市も生まれてきた。七世紀に発達したテマ制は、古代以来の広域的な大軍政管区を基礎としていたが、十一二世紀になると都市や城塞（カストロン）に隣接した、より小さな地域単位の軍政管区に細分化していった。地方行政は中央集権型の皇帝の代官から封建領主のほうに移っていった。こうしてビザンツ属州の地方都市は行政上、一定程度、独立する傾向を示した。十四世紀半ばには商人や手工業者も力をつけるようになっていた。しかし、都市の経済活動の狭小化と帝国としての経済的な統一が瓦解するに至ることを背景として、ビザンツ都市は、ついに独立した都市市民層を形成することはなかった。<sup>22)</sup> 確かに、九世紀頃から十二世紀まで周辺国家との平和が続ぎ、都市における貿易は増大し、経済的に回復を取り戻したかのように見えた。しかし、ビザンツ都市は古代ギリシャ・ポリスの民主制のように活発な機能を果たすことはなかったのである。前述のように、十一二世紀の属州都市分立化の傾向は各地方の封建領主による分離的な支配をもたらさしめた。しかし、西ヨーロッパのように、都市の自立的なコミュニケーション形成にはつながらなかったといえよう。

一般にビザンツ都市はビザンツ帝国を構成する細胞であつて、その市民権は血統によつていたといえる。<sup>23)</sup> 都市政治も古代ギリシャ社会と類似する点を持ち、都市上層部は大土地所有者、聖職者、教師、医師、弁護士、建築家などであり、彼らのほとんどは農村に土地をもつていた。小商人や手工業者は国家に対して財政貢献という奉仕の義務があり、五年ごとに五年税と商人税を払つていた。さらにビザンツ帝国の時代になると、もともとローマ共和政期の民主的な議

会であった都市参事会は、民主的な自治体として機能を低下させていったのである。都市参事会員は、既述のように土地所有者であることが条件とされ、都市の自治というよりは帝国維持のための道具となっていた<sup>24</sup>。帝国政府の徴税が増大するようになると都市の財源が減るようになり、都市の進取の気性も活力も失うようになっていった<sup>25</sup>。その結果、中央政府の道具としての都市参事会の性格は強まり、帝国政府は、都市擁護官等の行政機関を設置し、中央政府への都市の従属という面を強化していった<sup>26</sup>。帝国政府は都市参事会の上に地方行政機関を設置した。このことよって、地方機関は、国家行政の末端として都市における徴税の管理、参事会員の指名、公的な奉仕行為の監督、公共建築物建設の監督、食糧配分、都市財政や都市参事会の人事など、広い範囲にわたって都市政治を支配するようになった。このように、都市自治は事実上、地方官僚組織に押えられていくようになったのである。六世紀以後、都市参事会制度は、こうして事実上、消滅し、大土地所有者である中央官僚に牛耳られることになった<sup>27</sup>。

### 3 国際商業都市コンスタンティノープル

コンスタンティノープルは、ビザンツ帝国の首都として貿易量において他の地方都市を凌駕し、ほぼ貿易を独占していた。しかし、この貿易は、教会・王や貴族諸侯などを消費者とする奢侈品貿易を主体としていた。帝都の経済活動は首都長官によつて管理されていた。商工業者で構成される同職組合があり一定の自治を保っていた。しかし、同職組合の長は国家によつて任命され、細かい諸規則によつて商業・手工業活動が取り締まられており、輸出入禁止品の摘発などがしばしば行われた。首都コンスタンティノープルではまた、皇室直営の工場があり、絹製品をつくり、独占的に輸出していた。都市の大商人は、まさに政商と呼ばれる存在であり、富を築くために国家の庇護を求め、大金を積んで国家の官職である徴税官のポストを買い取ろうとした。つまり、ビザンツの商人はロシアのゴスチと同様に、商人であ

ると同時に国家財政管理の官職についていた。また、西欧中世都市の商業資本が手工業等の産業資本の振興を促したことは異なり、このビザンツの帝都では戦争の危険という政治的に不安定な状態の下で、商業資本から産業資本への転換は容易にすまなかつた。<sup>28</sup>

コンスタンティノーブルの外国人居住区には、ヴェネツィア人、ジェノヴァ人、ピサ人、ユダヤ人、ロシア人、ペチエネグ人、ヴァリヤグ人、トルコ人など様々な民族が住んでいた。各居留地の中心には商館があり、商業取引所、商品保管所、一時滞在のための宿泊施設があつた。また、居留地のいくつかは教会を建てる権利を認められていた。これらの外国人の貿易活動が、東西地中海貿易の仲介者としてコンスタンティノーブルの経済的繁栄を支えていたといえる。居留地教会は礼拝のみならず、対外経済活動のための情報センターとして機能した。<sup>29</sup> ヴァリヤグ人やロシア人は、ドニエプル川と黒海を経由してビザンツと通商関係を持ち、帝国の傭兵として活躍していたことは既に述べたとおりである。彼らは皇帝直属の近衛軍団を結成し、「ヴァリヤグ人聖母の教会」を聖ソフィア寺院の内陣に建立し、戦場出陣の際には精神的な拠りどころとなつた。<sup>30</sup> このように様々な地域からいろいろな民族が首都に来ることはビザンツの側からすれば、外国の諸民族が、東ローマ皇帝の慈悲と恩恵を求め彼のもとで仕えようと参集するというビザンツ文明の優越性を示す証拠だつたのであろうか。

さて、コンスタンティノーブルはどのようなにはじまつたのであろうか。コンスタンティヌス帝は人口誘致政策によつて新首都の住民を全帝国から集めたという。首都建設から七十年の間に、人口は四倍に伸び、急速な過密化は水道の供給や建築用地の不足をもたらした。中期コンスタンティノーブルの都市空間はどのようなものであつたのだろうか。首都には、皇帝権力の象徴である宮殿、元老院以下の官庁街、様々な祭儀を執り行う聖ソフィア寺院、十万人以上の収容能力を持つ大競馬場があつた。<sup>31</sup> ギリシャ文化を継承するビザンツは元来、都市の中心にアゴライゼンとよばれる広場を持ち、そこは社交の場となつていた。ビザンツ帝国の建築史上最高傑作といわれる聖ソフィア寺院は、中世ローマ帝

国の宮廷儀式や国家行事の舞台であり、総主教座として信仰の中心でもあった。教会堂の中心が広く高く伸びたドームは、全能の神の住みかを華麗に表現するものであった。

このような華やかな都市施設建設の裏には、重い税負担を担う商人層、農民層がいたことを忘れてはならない。皇帝、貴族、官僚、軍隊、聖職者などからなる国家上層部を実際に経済的に支えていたのは、特に租税負担の大きかった農民と手工業者などであった。安定した租税収入を確保するためには、農民と手工業者が、代々生業を世襲することが好都合であり、社会階層は、固定化していった。<sup>32</sup> 商業、手工業が、一般庶民の生計を支えていたが、都市貴族は、国家による税の徴収とともに、これらの商人や手工業者から家賃を取り立てることによって収益を得ていた。海上貿易の振興は、国家によって行われ、貿易の特権は、ただコンスタンティノープルの商人にだけ付与されたので、商人側も、宮廷に取り入るようになった。市場、特に地方市場で指導的な役割を果たしていたのも、商人ではなく、大土地所有者や修道院であった。これは、十世紀頃のコンスタンティノープル近郊には、修道院主体の経済が形成されていたことからわかる。

既述のとおり、コンスタンティヌス帝時代に、新ローマ、コンスタンティノープルが創設された。皇帝は、貴族を中心とする議員をこの新都にかき集め、元老院を設けるようになった。共和政時代の最高行政官護民官（コンスル）は形式上、存続した。しかし、ビザンツ帝国末期には、この職は、皇帝に任命される単なる名誉職にすぎなくなっていた。<sup>33</sup>

また、ビザンツ帝国下の都市参事会は、既述のように、古代ギリシャのポリスにも一脈通じるころがあった。それはもともと、奴隷所有を基礎とした土地所有を前提とするものであったために、奴隷制が弱体化し都市上層民の土地所有が消滅すると、この都市参事会という仕組みは、形骸化したのである。<sup>34</sup>

#### 四 中世・近世以降における東西ヨーロッパの関係

##### 1 ドイツ東方植民と東ヨーロッパ地域における都市建設

七―九世紀にかけてスラブ人が、チェコ、モラワ地方、ポーランドやハンガリーに砦を中心とした前都市的な集落を築いていたことがわかっている。これらの集落には支配者が住む砦があり、集落は、教会、職人の住居、市場用の広場、そして周辺に農民が住むといったごく簡単なものであった。しかし、十二世紀にはこれらの集落も、ドイツ化されて、スラブ人の砦を基礎にして都市としてかたちづくられるようになった。十二世紀半ば、ハインリヒ獅子公の頃、ザクセン地方などでドイツ人の東方植民が活発化した。聖職者や騎士、農民など幅広い層のドイツ人が、エルベ川以東に移住するようになった。この頃、リューベックなどのドイツ人による都市建設が行われるようになった。東方植民によって形成されたドイツ人の都市型集落はドイツ都市と同じ権利が認められ、西ヨーロッパ中世都市の特徴の一つである農村と都市を区別する市壁が新しく築かれた。特に、東方植民で重要な役割を果たしたドイツ騎士修道会領では、このような都市が、盛んに建設された。都市建設には様々なケースがあった。農村が都市になったもの、軍事防衛拠点が都市になったもの、農村近郊の農産物市場が都市になったものなど、様々であった。このように、東方植民によってドイツ様式の都市が東方にも建設されるようになる、都市法や都市参事会の制度などが移入された。マグデブルク市の都市制度はグダンスクやケーニヒスベルク（現カリーニングラード）にも認められるようになった。例えば、現ラトビア共和国の首都、リガ市の起こりは、一一九九年に教皇イノケンティウス三世が、北方の十字軍としてブレーメンの聖堂

参事会員アルベルト・フォン・ブクスヘウデンをリヴォニア司教として有力貴族とともに派遣し、要塞を建設したことからはじまる。一二一〇年時点では、いまだ八〇戸程度の集落であったが、リガ市がバルト海貿易に関与しハンザ都市として経済的に発達し、本格的な都市建設が行われるようになった。一三〇〇年には、新市街が建設され、三〇〇〇人が住むようになった。ただし、当時、住民の約三分の二が北方ドイツ人（リユーベック、ブレーメン、ドルムント出身者など）で、残りはリヴォニアの現地人とロシア人であった。アルベルト司教は、土地開拓を目的とする武装集団である刀剣騎士修道会と協力し、リヴォニア地方の征服と土地開拓事業を展開した<sup>35</sup>。

こうした東ヨーロッパ地域のドイツ化にかなり遅れて、十五―七世紀にかけて、ポーランドやリトアニアといった西ロシア地域でも、「マグデブルク法」というドイツ式都市法が普及するようになった。西ヨーロッパのような自治的なツunft制度（職業組合）の考え方も、しだいに入ってくるようになってきた<sup>36</sup>。これは前に少し触れたように、ポーランドやリトアニアにドイツ植民がすすんだことと関係がある。これらの地域に定住したドイツ人は、ドイツ式都市法のもとに置かれていた。ドイツ式都市法は、ポーランドからリトアニア地方にも普及し、キエフ、スモレンスク、ミンスク、ノブゴロドなどにも伝播していった。ただし、カトリック教徒が実際の市政では優遇され、東方正教徒は重要な役職に就任するには制限があった。さらに、ドイツ式都市法のもとで都市参事会員は、ポーランド人やドイツ人が少数派にもかかわらず、ローマ・カトリックと東方正教徒の半々で構成されていた。ドイツの熟練職人が西ロシアに定住することにより、これらの都市の工芸技術水準は向上したが、西ロシアでは、貴族が、商業や工業に関わり、自分の領地から生産されるものを優先的に輸出し、貴族の個人消費のために無関税で産品を輸入するなど、貿易に介入していた。都市参事会には、富裕な家族がヴォイトと呼ばれる市政の役職を握る寡頭体制が支配するようになり、都市参事会は、実際にロシア人や東方正教徒を締め出すようになっていった<sup>37</sup>。

## 2 ハンザ都市とノブゴロド商館

中世における東西ヨーロッパ貿易は、南のヴェネツィア經由の奢侈品貿易ルートと、北のリューベック經由の日常品貿易ルートがあつた。ここではバルト海貿易を中心にロシアと西ヨーロッパの関係を説明する。

ハンザ同盟の繁栄とともに、バルト海貿易も、スラブ人による通商活動に終止符が打たれ、ドイツ商人による通商網が、ノブゴロドなどスラブの都市を覆うようになっていった。リヴォニアではドイツの刀剣騎士団が進出し、十三世紀にはノブゴロドのヤロスラブ公と衝突した。ノブゴロドはヤロスラブ公の健闘によってこの進出を押しとどめたが、刀剣騎士団とドイツ騎士団の混成勢力は一二四〇年にはプスコフを占領した<sup>38</sup>。このように十三世紀には、東方地域に対する経済的な影響力拡大とともに、ノブゴロドにドイツ・ハンザ商館ができ、ドイツ商人がノブゴロドの貿易を支配するようになっていた。ドイツ商人は、ゴットランド島のヴィスビを中継拠点としてロシアに進出し、それまでバルト海貿易に従事していたロシアの貿易商人を駆逐してしまつた。

ドイツ商人は、商館で冬を過ごし、ロシアの現地情報を収集し、有利な条件で毛皮を購入しようとした<sup>39</sup>。ノブゴロドのハンザ商人は、中央広場近くに垣根で仕切られた居住区をつくり、商人団が管理する聖ペーター教会が、重要書類の保管、商品の貯蔵、会議の場所となつていた<sup>40</sup>。ドイツ商人がノブゴロドでいかに活躍していたかは、リューベック、ヴィスビその他のドイツ商人がロシアに来訪し、ノブゴロドでは司法上一種の治外法権的な要素を持ちドイツ商人に関する訴訟が現地では決着をみないときは、ヴィスビが上訴地となつていたことからわかる<sup>41</sup>。



### 3 バルト海貿易と東西ヨーロッパの経済格差の拡大

十五世紀末には、西ヨーロッパと東ヨーロッパの発展の度合いは、こうしたバルト海貿易の影響で差がついたといわれている。ドイツ東方植民がはじまったばかりのころは、東西ヨーロッパの封建制の違いはいくつかの点を除けばまだ決定的ではなかった。

十五世紀以前において、東ヨーロッパでは騎士や貴族は戦士、土地所有者、植民地への移住を仲立ちする人々として事実上の「封土」を持っていたのであり、西ヨーロッパのように厳密な主従関係と封建的な契約の上に成り立っていたわけではない。また、十二―十三世紀にかけて、西ヨーロッパで農民の賦役義務が消滅しはじめ、農民の領主に負う義務が軽減化されはじめていたのに対し、東ヨーロッパでは逆に封建領主の権力が強化されはじめ、もともと自由農民であったものが奴隷と変わらない状況に陥った。一般に領主は、領民を保護するかわりに、地代の徴収、裁判、耕地労働をおける使役権を領民に対して主張できた。西ヨーロッパで領主のこれらの権限は、一人の領主によって独占されることはなくなっていたのに対して、ハンガリーやポーランドなど特に東ヨーロッパ北部では、一人の領主が逆に各種の権限を一身に集中させていった。東ヨーロッパ北部では十三世紀以降、貴族領主が最初に国王に対する抵抗権や免税特権を獲得し、領民に対し民事・刑事裁判権を手中に収め、十五―十六世紀には領民に無償労働を強制し、労働力不足への対処として農民を領地に縛り付ける権限を手に入れるようになった。貴族領主はこのようにして、最終的には領地農民に対する全人格的な支配を確立した。このように東ヨーロッパ北部では、強大な権限を手に入れた領主支配の土地所有制度が、普及していった。

さらにバルト海貿易によって西欧経済の中心化、そしてその裏返しとして東欧経済の周辺化、ヒンターランド化が明

確になり、東ヨーロッパは、西ヨーロッパの食糧基地となつていった。穀物輸出に対する需要が増加すると、領主は、農民から良質な土地を取り上げ、自分の領地を増やし、土地を奪われた農民を労働力として利用した。すなわち、貿易が、西ヨーロッパで農奴を解放し都市民の勃興をもたらした封建的な権力を減じたのに対して、東ヨーロッパでは貿易が、封建制度を強化させる結果となつたといわれる（いわゆる、農奴制の再強化である）<sup>(4)</sup>。

ハンガリーの東欧経済史研究者、ベレンド・I・Tとラーンキ・Gの主張も上述のものと同様である。彼らは、東ヨーロッパの経済発展の分岐点を十五―六世紀に求め、西ヨーロッパが、封建的な農業諸条件を解体させ、富農の登場、貨幣地代の普及等によつて農奴制を徐々に消滅させる方向に向つたのに対して、東ヨーロッパは、ますます工業化される西ヨーロッパとの経済関係において農業的な後背地となり農奴制と封建地代を存続させたとしている。十六―八世紀にかけて、東ヨーロッパでは概して、農奴の束縛を復活させ、ハンガリーやロシアにおいて移住の禁止を法律で定めるようになった。西ヨーロッパで生じた農場の近代的经营者の登場、借地農による賃労働使用と商品生産という傾向は、東ヨーロッパでは見られなかつた。ベレンド・I・Tとラーンキ・Gによれば、東ヨーロッパでは「初期の資本主義発展が阻止され、農奴制が固められ、商品生産者としての領主の大農場が強化されたことにより、……領主は政治においても経済においても、都市のブルジョアジーに優越する支配権を獲得した。都市は商業とギルド的手工業の水準で停滞し、それゆえに、都市の発展の主たる路線は、工業発展にはなく、農業的性格をもつた市場町の発展に依存することとなつた。工業はまばらで弱かつた。商人資本は狭い限界内に閉じ込められ、その工業への流入ははじまつてさえないなかつた。それゆえに、都市は、近代的な都市の発展のダイナミズムを欠いて、中世的な状態のままに残つたのであつた」<sup>(5)</sup>。

このように、ベレンド・I・Tとラーンキ・Gは、一七八〇―一九一四年までの期間を東西ヨーロッパ発展の分岐点が決定的となつた時期として位置付けた。つまり、この時期に、西ヨーロッパが、英国の産業革命とフランス革命を終

えて経済離陸のための好条件を築いたのに対して、東ヨーロッパは、西ヨーロッパからの急速な経済発展と工業化という挑戦を受けて、西ヨーロッパの工業中心地域に対する食糧基地となつていったといふのである。東ヨーロッパ地域は、西ヨーロッパからの経済力浸透と自国伝統社会の崩壊の危機という局面に直面し、弱体な新興ブルジョワジーや市民層の欠如を背景として、旧封建領主層を温存する「上からの改革」をすすめていった。しかし、この「上からの改革」は、市民革命を経ることなく、旧制度の要素が多々残存せられ工業化と資本主義の発展の基盤づくりという面で、不徹底な面を残した。例えば、上からの農業の近代化政策としてすすめられたロシアの農奴解放は、旧領主層の存在を温存させた。ロシアは、一八六一年以降の農奴解放令以後においても、前農民の三分の一は以前のように領主に封建的賦役を行い、全土地の三分の二は地主の所有であつた。<sup>(4)</sup>

産業革命という西ヨーロッパからの挑戦に対して、ロシアは、どのように近代化の必要性をみていたのだろうか。一八六〇—七〇年代、ロシアはクリミア戦争でイギリス、フランスの先進技術の優秀さを目の当たりにして急速な工業化を至上命題とした。ロシアは、クリミア戦争で科学技術の遅れと軍事力の脆弱性を露呈してしまつたからである。戦争の敗北原因の一つはロシア軍の旧式兵器と経済や社会の近代化での立ち遅れにあつた。産業化時代に軍事強国の地位を維持するためには、物資や兵員を迅速にかつ大量に輸送できる近代的な兵站能力が問題とされた。

このような状況のなか、ロシアは、当時の自由主義的な関税政策によつて工業原料、半製品や完成品の輸入を積極的に推し進め、外資導入を通じて鉄道建設や鉄道機材製造業の育成を図つた。しかし、輸入が輸出に対して急増すると、ロシアの貿易収支赤字は急増し、国家財政の悪化によつて工業化プランは頓挫してしまつた。一八八〇年代以降、ロシアは、従来の鉄や大麻等の輸出に代えて、穀物、砂糖、卵、バターなどの食料品輸出、石油などのエネルギー資源など一次産品の輸出に特化していった。鉄材や機械製品などの輸入の急増を押えるために、これらの工業製品の国産化がすすめられ、南ロシアでは製鉄業や機械器具製造が開始されるようになった。一八九〇年代には露独通商条約によつて鉄

道建設がすすみ、ドイツから工業製品、化学製品の完成品を輸入することによって、ロシアは工業化をすすめていった。しかし、第一次世界大戦直前には、小麦輸出の減退によってロシアの穀物輸出はふるわなくなり、経済発展にまともやブレーキがかかった。二十世紀初頭、ロシアの最大の貿易相手国はドイツであつたが、ロシアは、ドイツとの貿易で穀物輸出と機械製品輸入という垂直貿易にますます依存するようになり、西ヨーロッパ先進地域の食糧供給後背地となつていった。以上、ここまでの話を要約すると、十九世紀半ばから第一次世界大戦直前までの間に、ロシアは、西ヨーロッパ、特にドイツから機械設備、技術や資本の導入などを基礎にして工業発展を図ろうとしたが、貿易収支赤字になやまされ、工業化を焦ろうとすればするほど、輸入が必要になるというジレンマに苦しんでいた。以上のように西ヨーロッパとの経済関係拡大はロシア経済においてもその周辺化を進めたといえよう。<sup>(4)</sup>

## 五 ロシアの都市

ここまで中世・近世以降の東西ヨーロッパ経済関係の流れとロシア・東欧地域の周辺経済化について説明してきたが、次に経済社会の発展形態の象徴としてのロシア都市に光をあてて見ていくことにする。

### 1 古代・中世ロシアの都市

古代ロシアのバルト海周辺地域では、商人が、河川の交通路を通じて黒海沿岸のギリシャ植民都市と交易し、この商業路に沿って集落を形成していた。九世紀にはキエフ、ノブゴロド、ポロツク、スモレンスクといったドニエプル河沿

いの通商型の都市集落が、緩やかな連合体をつくっていた。しかし、九世紀末になると、このなかでオレーグ公率いるキエフが、指導的な役割を果たすようになり、コンスタンティノープルや西ヨーロッパ、アジアとを結ぶ一大商業センターに成長していった。<sup>(46)</sup> このルーシ時代には、住民はキエフやノブゴロドでは民会（都市集会）を招集し、日常的な訴訟問題や大公の任免に至るまで様々な問題を討議して決めるという、一種の民主的な制度を持っていたことはよく知られている。<sup>(47)</sup> 官吏も民会で選出されたのであつて、大公に任命されていたのではなかつた。これらのルーシ時代の諸都市には、民会のほかに、その執行機関としてゴスポグと呼ばれる小さな参事会が機能していた。<sup>(48)</sup>

ここでは、民会の事例としてノブゴロドをみることにしよう。ノブゴロドは、既述のようにバルト海と黒海を結ぶ交易の要衝にあり、ヴォルガ河経由でカスピ海にも通じ、商業・手工業が発展していた。街は、その形成の当初からヴァルホフ河を跨ぐようにして発展し、左岸の西部地域には聖ソフィア寺院、右岸の東部地域には市場など商工区があり、両地域は、橋で結ばれていた。十四世紀末から十五世紀初頭にかけて、自治区が発展し、それを核として教会、修道院、総主教館、貴族諸侯の邸宅が形成され、ここからリガへの街道も発達した。ノブゴロドは、十二世紀から十六世紀にかけて、モスクワのイワン雷帝に統合されるまでの間、封建制を残存させた共和政的独立都市国家であつた。<sup>(49)</sup>

ノブゴロド公は、雇われの軍事指揮官という性格をもっていた。ヴェルナツキー・Gによれば、ノブゴロド公のポストは選挙で選ばれ、軍事指揮官としての公は特別な制約を立てて条約の形式をとつた契約書にサインしてはじめて就任できた。公は条約によりノブゴロド市内に軍を常に駐留させることはできなかった。このように、ノブゴロド人は軍事指導者が持つ権限の制限に気を配っていたことがよくわかるであらう。ノブゴロド人は選んだ公に都市の防衛を託していたわけである。<sup>(50)</sup> しかし、このような一種民主的な諸制度も、十四世紀にはモンゴルによつて粉砕されて、ノブゴロドは十五世紀末にはモスクワによつて併合されてしまふ。

さて、典型的な西ヨーロッパ中世都市のいくつかは遍歴商人の定住によつて発達してきたことが知られている。それ

では、中世ロシアの都市はどのようにかたちづくられてきたのだろうか。ロシアの都市は、既に述べたように都市の市民社会の未成熟、出稼ぎ労働者の一時的都市流入による都市と農村社会の未分化現象等の理由によってあまり発展していなかった。黒川知文氏によれば、北東ロシアにおいて都市の多くは、十四世紀以降、世俗のわずらわしさを逃れて形成された東方教会の修道院によって形成されたという。修道士たちが観想と労働に専念できる僻地の森や河川沿いの地域に集落をつくと、これらの修道士に続いて、信仰篤い農民や商人の家族が移り住み、信仰を共にする共同体と集落を形成していった。修道士たちは、修道院の周囲に市場ができ世俗の雑踏に悩まされるようになると、そこを去り別の場所に隠遁と観想のための静けさを求めた。このようにして、修道士たちの共同体が核となつて、僻地に次々と都市的な集落が形成されるようになったのが、ロシア中世都市の起源であるという。一二四〇—一三四〇年に三〇ヶ所、一三四〇—一四四〇年に一五〇ヶ所の修道院集落が建設されて、修道院を核とした辺境への信徒入植活動が、北東ロシアにおいて都市の形成を促したものであるという。<sup>51</sup>バルト海地方では、ドイツ騎士団や刀剣騎士団のドイツ東方植民によって建設都市が東進するのに対峙して、ロシアの僻地型都市集落が分散していった。このため、ポーランド・リトアニアというカトリック文化圏と東方正教会文化圏の対峙する地域では、様々な文化的な衝突が起きたことは、現在のユニオン教会の存在でも理解できるところであろう。

また、古代ギリシャ語と古代教会スラブ語をめぐる聖書や典礼テキストの問題を発端として、ニーコンの典礼改革が行われ、ピョートルの宗務院制度設置によって教会が国家の管理下に置かれるようになること、これら世俗化と西欧化に異議を唱えて抵抗する古儀式派というセクトが、皇帝の支配が及ばない辺境の地に集落を構えるようになった。彼らは、ポーランド国境地帯、ウラル、西シベリアなどに砦を築き、自分たちの信仰共同体を地理的に分散し、かたちづくつていった。<sup>52</sup>一六六七年のモスクワ教会会議でロシア正教会は、古代ギリシャ語典礼の正当性を認めこれに戻ることを決議したが、古儀式派は既述のとおりこれを認めずその発生を見るようになった。<sup>53</sup>さらには、元来、典礼改革に対する

反抗ではじまった古儀式派の運動は、次第に国教会としてのロシア正教会のあり方と国家権力そのものに対する抵抗に発展していった。<sup>54</sup> 古儀式派は、初期の指導層であった貴族や聖職者から次第に農民や商人、コサックなど一般民衆にまで支持層を広げていった。古儀式派は、商業資本を基盤として発展し、北ロシアの農民、ウラルの鉱山労働者、シベリアの開拓民、南西ロシアのコサックやベラルーシ・ポーランド・リトアニアなどへの移住者の間に広まり、ニジニ・ノブゴロドやヴェトカなどを活動の拠点とした。<sup>55</sup> 古儀式派の信徒たちは、一般に、勤勉、誠実で儉約家であり、一種、謹厳なプロテスタント信徒に似ているところがあつた。彼らは、例えば、多くの商人が集まり定期市で有名なニジニ・ノブゴロドの市場では、その堅実な商売で尊敬され、税金の支払いにおいても、その誠実さで政府の役人に尊敬されていた。<sup>56</sup> 古儀式派は「富は力なり」を認め、特に商業で才能を発揮し、勤勉さと節約で財産を蓄積した。なかには大富豪となり、トレチャコフ美術館など数々の美術品の収集に努め芸術の保護者となる者もいた。時代が下り近世になると、エカチエリーナ二世の時代には、商業の中心地モスクワで工場や邸宅の多くが、古儀式派教徒の資産となり商業分野に手広く進出していったといふ。<sup>57</sup>

## 2 近世ロシアの都市

ピョートル大帝以前のロシアの都市は、河川や運河沿いに発達した通商型の都市集落から発展したもので、既に説明したような修道院を核とした自給的な僻地立地型の信仰共同体集落から発展したものがあつた。しかし、やがてピョートル大帝の西欧化政策の象徴としてのモデル都市、サンクト・ペテルブルクが計画されるようになった。このサンクト・ペテルブルグは、全く何もないネヴァ河沿いの湿地帯に築かれた、石造りの整備された街であり、ロシアの近代化を推し進め伝統的な農村的な生活様式を払拭するという目的のもとにつくられた。この新しい都市の建設は、まさにみ

るべき都市文化のないロシアに一種、ユートピア的な要素をもつ華麗な西欧様式のバロック都市を築くということを目指した。しかし、その美しい都市には西欧近代化という皇帝の理想に見合うべき西欧型の市民とその生活様式が欠如していた。このため、新首都建設とともに、ピョートルは、西欧風の服装やヘア・スタイル、食文化など、住民に詳細にわたって注文をつけ、生活全般にわたる徹底した西欧化を要求したのである。さて、ここでもう少し詳しくサンクト・ペテルブルクをみていこう。

ピョートル大帝は、ロシア正教の総主教を皇帝の機関、宗務院の下に置くことによつて、さらに保守的な正教会の勢力が集まる街、モスクワを後にすることによつて、新しい世俗世界中心の街、サンクト・ペテルブルクの建設に着手した。一七〇三年の聖ペテロの祝日に、新首都創建の鍬入れが行われた。新都は軍港要塞としての街の起源を象徴するかのよう、最初にペテロパヴロフスク要塞が設置された。ピョートルはまずこの新都の防御を重要視した。敵の侵入を撃退するために、ネヴァ河の河口に二つの城塞を設けその間をはさんで市街地を形成するようにした。サンクト・ペテルブルクは、まさに重商主義国家としてのロシアが、バルト海の通商の覇権をねらつてスウェーデンに戦いを挑んだ北方戦争に由来する。ネヴァ河は、歴史的に北欧スカンジナビアやハンザ諸都市の商人たちが、コンスタンティノープルやアジア・中近東、ギリシャ諸都市に行く通商水路の起点にありスウェーデンやドイツ騎士団などと通商の覇権をめぐつてしばしば紛争が起きていたところであつた。ピョートルは、ここにロシア帝国の軍港要塞都市を置くことによつて、西欧や北欧諸国にバルト海の覇権におけるロシアの意思を示し、内政面では「西欧に開かれた窓」として西欧文化の導入を図ろうとした。一七〇三年にペトロボヴロフスク要塞を建設すると、その翌年には左岸に海軍省と造船所を建設した。夏宮がつくられ、一七一一年には皇帝の住居「冬の家」（後の冬宮）が建てられた。一七二二年にはサンクト・ペテルブルクは首都となり、モスクワとサンクト・ペテルブルクの二都体制となつた。十九世紀末にはサンクト・ペテルブルクは、人口一二六万人を数える大都市となり、革命後、レニングラードと改名された。その後、モスクワが



単独の首都となつてからは、政治・経済等の諸機能が首都に移転され、レニングラードは相対的に地位を低下させていった。<sup>89</sup>

### ①軍事改革とサンクト・ペテルブルク

ピョートル大帝の改革は、軍事からはじめて行財政、商工業、宗教、文化など社会のあらゆる領域にまで及んだ。北方戦争以前、バルト海はスウェーデンによつてロシアの外海への出口は塞がれていた。このため、西ヨーロッパとの交易ルートは、ノブゴロドやプスコフ經由による陸路交易のコストが高くなるために、コラ半島を迂回してアルハンゲリスク經由のルートによつてしか行うことはできなかつたのである。ピョートルは、西欧化政策の一環として都市改革を実施しようとした。地方長官による都市、自治の介入を排除する目的で、一六九九年に都市自治組織、ラトウーシャ（市会）が設置されたのがそれである。西ヨーロッパを訪問したピョートルは、西ヨーロッパ諸都市のように、都市経済の繁栄と市民社会の誕生を期待していたのである。しかし、ラトウーシャは、国家への高額納税を義務付けており、重税にあえぐ民衆の反対にあり、上からの自治都市建設と市民社会創設は、失敗に終わった。<sup>90</sup> 例えば、市会は地方長官からは形式上は独立していたが、実際には別の国家機関に従属していたのである。これはピョートルの改革全体の本質を考えると、容易に理解できるだろう。つまり、戦争こそがピョートル改革の原動力であり、経済基盤の下支えは租税負担を担う農民であつた。逆説的であるが、その農民が徴兵制に駆り出されるようになると、経済的には行き詰まる結果に終わる。北方戦争初期、ピョートル大帝は、当時スウェーデン領であつたナルヴァの戦いで大敗を喫し、軍事再建に乗り出し、ロシア全体を兵營にでもするかのように戦時体制を築いていった。村々から農民が徴兵され、ロシアの主要都市に軍需品製造のための工場が建てられ、外国で大量の武器が買い付けられ、教会の鐘は大砲鑄造のために接収されたのである。その結果、軍事費が国庫支出の大部分を占めるようになり、様々な名目で国民に税金が課せられてい

た。国家の財政支出における軍事費の割合は、五〇%（一六八〇）、七五%（二七〇一）、八〇%（一七一〇）と急速に増加し、スウェーデンとの戦争終結であるニスタットの和約後も、七一%（一七二五）と高い比率を維持していった。国家は軍事費調達のために、貴金属の輸出禁止、塩・酒・石炭・キャビア・タバコ等の国家による売買独占、中国貿易も国家独占とした。人口調査によってこれまでの世帯単位の課税から個人単位の人頭税を導入し、農民や教会使用人、司祭の家族等は、課税対象となり、彼らのなかには農奴に転落していったものがみられた。国家反逆の徒、古儀式派は特に二倍もの人頭税が課された。軍隊は、それぞれ農村社会に配備され、民衆から租税徴収の任に就き、徴兵の周知徹底を行い、地方の行財政全体にも介入していった。これでは、自治都市の育成が失敗に終わったのも当然であったろう。<sup>(61)</sup>一七二一年、聖職参事会（宗務院）の発足によって、教会は国家に従属する一機関となり、教会の土地財産の国家による没収が行われた。このような動きとともに、民衆による世俗の自由な経済活動が失われ、精神世界も自律性を失っていったわけである。<sup>(62)</sup>さらに、国家行政を監督する十二の参議会の一つとして都市参事会が設けられ、ノブゴロド、リガ、サンクト・ペテルブルク、ニジニ・ノブゴロドなど全国諸都市の商工地区住民を統轄した。都市の重要な役職（市長、参事会員、参事など）は、建前上、商工地区の集会で選出されることになってはいたが、都市住民のうち過半数（五〇―九〇%）を占めていた雑役夫、日雇い労働者などは最初から投票資格がなく、都市政治から排除されていた。<sup>(63)</sup>ピョートルはまた、ギルドなど西欧的な都市自治組織を導入しようとしたが、都市行政は、富裕な一握りの第一ギルド会員（卸売り商人、商船船長、学者、医者等）の手中に収められ、手工業者や小売商人は排除された。<sup>(64)</sup>

既に述べたように、一七〇三年以降、ネヴァ河口で新首都建設がはじまったが、この工事が国民に強い労力と犠牲も、並大抵ではなかった。さらに帝都サンクト・ペテルブルクでは、都市の治安維持と秩序を守るために「ポリツァイ官房」が設置され、都市住民の日常生活において、建築、防火、街路清掃、住民の監視など、様々な禁止や命令が詳細に定められた。こうした国家主体の都市官房は、西欧中世都市が自治組織として夜警団をかたちづくった経緯とは異なる

り、民衆を強制的に夜警団に組織させて、都市生活の幅広い管理を実施しようとしたものであった。ピョートルは、乞食に対する喜捨から西欧風の洋服の着用、食事、余暇の過ごし方に至るまで、ことこまやかに住民の日常生活全般にわたる秩序、規律を試みたのである。<sup>65</sup>

サンクト・ペテルブルクは、外国貿易増大による国富の増強とバルト海覇権を維持するための海軍増強の象徴であり、外面的には西欧都市に似せてつくられたが、その出自は異なっていたといえる。帝都では、高額保護関税によつて王立のマニファクトリアが設立、保護育成され、殖産興業のための道路や運河など社会資本が整備された。工業は軍需関連産業を中心に育成され、ウラルの重工業（金属精錬、武器生産）、モスクワの繊維産業（海軍軍艦用の帆布、軍服製造等）、カレリア地方の冶金業等が育つた。しかし、このような国家主導型の殖産興業政策は、製品がもつぱら国家の注文にあつたことなどから、技術革新も自立的な企業家精神も育つことがなかつた。工場労働も、強制労働、国有地農民の労務提供等に依存していた。十七世紀の富裕な政商、ゴスチも、本来の商業から切り離され、国家勤務を余儀なくされたため、自立的な社会階層としての商人層は登場しなかつたといつても過言ではない。新首都サンクト・ペテルブルクの建設に関しても、富裕な商人は皇帝の命令により他の場所からここへ強制移住を命ぜられたことから、この都市の性格がわかるであろう。<sup>66</sup> もともと、サンクト・ペテルブルクは、モスクワから遠隔の地にあり、気候条件も悪く、人々はなかなか定住しようとはしなかつた。一七〇八年には皇帝は皇室、貴族、政府の役人、富裕な商人たちを強制的に移住させた。このように貴族や富裕な商人たちは無理やりに移住させられたことに不満を持っていたが、都市建設労働に徴用されて連れてこられた労働者たちの状況はもつと過酷であつた。労働者の中には建設労働中に凍死する者、衛生状態の劣悪な小屋で赤痢やマラリヤ等の疾病で死亡するものが続出した。労働力の不足が出てくると、人的な補充を図るためにフィンランド人、タタール人労働者も連れてこられて強制労働に従事した。華麗な帝都建設の裏で何百もの村が働き手を失ひ荒廃していったのである。まさにサンクト・ペテルブルクは「労働者の屍のうえに築かれた都

市」といえよう。

ピョートルは、ロシアの主要な貿易港をアルハンゲリ斯克からサンクト・ペテルブルクに移すために、税制等の各種優遇策を活用した。入港料をスウェーデンの港よりもはるかに安くした。また、サンクト・ペテルブルクで毛皮等の輸出品を積み出しする場合、アルハンゲリ斯克よりも格安で利用できるようはからった。入港する最初の船舶には報奨金が渡され、この新港を利用する外国商人に特典が付与された。こうして外国貿易港の移転はピョートル時代に早くも達成された。北方戦争で勝利を収めたロシアは、バルト海の覇権を手中に収め、リューベックやリガ、ダンツィヒ、ケーニヒスベルク（現カリーニングラード）など、バルト海諸港と交易を行い、国家貿易によってペテルブルクは栄えた。<sup>67</sup> エカチェリーナ二世の時代になると、ドイツ人の入植が奨励されるようになり、これらの入植者はダンツィヒ、リューベック、ハンブルクから出発して、ペテルブルクを経由してロシアの内陸各地に向かったことはよく知られている。<sup>68</sup> サンクト・ペテルブルクは文字通り、バルト海を通じて外部西欧世界との窓口であったわけである。

## ② アストラハン・カザン等陸路交易都市

これまでピョートル大帝以降のサンクト・ペテルブルクを中心に話をすすめてきたが、ここでは時代を前後するが、十六世紀ヴォルガ河河畔の陸路交易都市、アストラハンとカザンについても少し触れておくことにする。一五五六年ロシアのアストラハン汗国征服後、アストラハンとモスクワ・イラン・ブハラ・ヒバという隊商路の中継点となった。ここにはモスクワ公国による東方貿易活動が集中し、ロシア、タタール、イラン、アルメニア、トルコなど諸国の商人が立ち寄った。アストラハンの商工地区には東方貿易商人のために二つの貿易商館があり、商品保管と商業に必要な各種の情報が交換されていた。バザールではロシアの毛皮、トルコ、中央アジアの織物、インドの香料等が売買され、これらの商品は税関長と役人によって検査・管理されていた。東方国家の商品のほとんどはヴォルガ流域、モスクワなどに

送られ、十六世紀後半のアストラハンは、モスクワとイラン、アゼルバイジャン、中央アジアとの交易中継点としてロシア国家にとって非常に重要であった。<sup>⑥)</sup>

ヴォルガ河上流のカザンも東方商業の重要な中継点であり、一五五二年ロシアによるカザン汗国併合後、ブハラ、ヒバ、イランの商人たちはここを通じて織物などを売り、ロシアの諸都市へ商品を送っていた。カザンはまた、皮革、蜜、毛皮の特産品を持ち、東方諸国へ輸出された。カザンのさらに北にあるニジニ・ノブゴロドは、アストラハンとモスクワを結ぶヴォルガ水運の中心地であり、東方貿易の中継点でもあった。ここでは皮革などを輸出していた。<sup>⑦)</sup>

### ③ ロシアの東進とウラジオストク建設

十一世紀にはロシアの東、ウラル山脈の西に広がるユグラとよばれる地は、毛皮の最高級の材料であるクロテンの産地としてヨーロッパに知れわたっていた。この地域については十一—十二世紀にノブゴロドの商人や狩猟企業家が毛皮の材料を追って探険したことが伝えられている。ロシアは一五八四年には白海のコラ半島に面した北ドヴィナ河口に貿易港アルハンゲリスクを築き、イギリスやオランダ、ドイツなど西ヨーロッパ向けの毛皮積出港として栄えた。ロシアが十六世紀後半以降、シベリア以東の地域を東進したのも、一つにはクロテンの毛皮を追い求めたからであり、先住民にはヤサクといわれる人頭税のかたちで毛皮の抛出を強制した。コサツク、毛皮貿易商人、ロシア人ハンターが、次々にシベリアや極東の奥地に入り込み、先住民を従えながらクロテンで懷を肥やしていた。このため、シベリアではロシア人によるヤサクの徴収に反撥する先住民の反乱がしばしば起き、シベリア総督府に対する過剰な資源採取に対して抗議の為の反乱を頻繁におこしていた。ロシアは欧露部に近いところからはじめて、西から順にクロテンを追い、ついに極東の毛皮の一大産地アムール河流域に達した。しかしロシアは、清朝の康熙帝と争いネルチンスク条約で外交上、敗退し、さらに東にすすんで太平洋岸のカムチャツカ半島、アリューシャン、アラスカにまで進出していった。<sup>⑧)</sup>ロシアはな

ぜ、北太平洋にまで進出していったのであろうか。その答えは、おおよそ次のようなものであろう。例えば、カムチャツカ半島はクロテンの宝庫であった。アリューシャンや千島列島はラッコの繁殖地であり、毛皮の産地として貴重であったからである。さらにロシアはこうして一七九九年、国策会社「露米会社」を設立し、極東方面の毛皮取引を独占的に取り扱わせた。毛皮材料の搬出など物資輸送を改善するために、ロシアの中心都市であるサンクト・ペテルブルクとの輸送路が課題となつて、アムール河という河川航行によつて困難を極める陸路を短縮させるようになり、十九世紀以降、中国と再度、国境紛争を起こすようになった。ネヴェリスコイは一八四九年にアムール河河口上流にニコライエフスクの軍事哨所を築き、一八五三年には下流にも哨所を築き、拠点を着々と建設していった。その後、一八五八年に、アムール河とウスリー江が合流する地点に、ハバロフスク哨所を建設した。こうして、クロテンの毛皮を追つて探険とそれに続いて輸送ルートの形成、商品と通商活動保護のための哨所、砦の建設が、その後のシベリア・極東地域のロシア都市の発展を築いたのである。<sup>27)</sup>

時代は十九世紀に下ると、ロシアの東アジア植民地経営が本格化していった。富裕な政商ストロガノフ家は、毛皮を中心とする貿易業者であり、シベリア・極東に進出しては原住民に走る宝石、すなわちクロテンの毛皮をとらせ、アルハンゲリスクやサンクト・ペテルブルクなど西方の貿易港を通じてフランスなど西ヨーロッパ宮廷貴族などに売り込んだ。彼らは絹製品を仕入れてはロシア国内で売りさばき巨万の富を築いていたのである。ストロガノフ家は、このようにクロテンの毛皮を西欧諸国に売り、その貿易収入でますます多くの毛皮を得て、皇帝から特典を引き出すために最上の品を皇室に献上していた。この政商ストロガノフ家は毛皮貿易を巨大な独占企業に発展させたという。イワン四世は巨大な特権をストロガノフ家に付与した。その特権とは、これらの政商が武装の私兵を持つ権利とシビル汗国攻撃のための城塞をつくるという権利である。その結果、シベリア各地で要塞を建設し私兵が駐屯したばかりか、領事裁判権をにぎるようになり、領地の住民から税を徴収しこれをモスクワに収める権利なども、特権として認められるようになった。

た。つまり、シベリア以東ではこのように、事実上、地方軍長の行政権から独立した私的、封建的な世襲領地や独立王国のようなものが、形成されていたのである。ストロガノフ家は、最初に皇帝から勅許を得てから二十年の間に領内に各種集落、修道院をつくり、領内の人口は五倍に増加した。ストロガノフ家は、既述のように領地経営とその事業の経済的な権益を守るために、重要な各地点に砦を建設する許可を国家から得て、私兵を配置した要塞線が築かれるようになった。<sup>26)</sup> なお、ここでいう城塞とは、ロシア語の「クレムリ」のことであり、堀をめぐらし、柵を囲み、そのなかに軍事・行政の指揮者、武装の私兵、商人、農民、職人などが住み、武器弾薬や食料保管のための倉庫がある砦を中心に発達した集落のことであるが、西欧中都市の市壁で囲まれた市民共同体としての都市の起源とはかなり意味合いの違うものであった。特にコサックは、シベリア・極東で遊牧民族の襲撃と掠奪に絶えず脅かされていた農村を私兵で守るために各地に城塞を築いていったのである。シベリア遠征で有名なエルマークは、冒険的なコサックで任意の辺境征服者であった。コサックたちは政商ストロガノフ家とかかわりシベリア・極東征服に重要な役割を果たしていくようになった。エルマークの率いるコサックは、城塞をつくり、原住民を支配し、彼らからクロテンを供出させるうえで政商の東方進出の実行部隊となった。<sup>27)</sup>

エルマークは、ストロガノフ家のシベリア開拓事業の展開過程で雇われた。このように、民間主体でシベリア・極東開発がはじまっていたが、やがて、これらの開拓事業はモスクワ公国に追認され、国家的意義をもつ事業として発展していくことになった。エルマークらは、シベリア征服の過程で数々の砦を築き、先住民に毛皮税を納めさせ、一六三九年には太平洋の東岸、オホーツク海岸に到達した。エルマーク以下の遠征隊は、毛皮のとれる新天地を求めて所要所に越冬所や柵、砦を築き、前人未踏の「クロテンを追う路」を切り開いていった。こうしてロシア人のシベリア・極東進出は、開拓途上に前述のような行政・軍事・通商拠点に城砦を築いていった。越冬所や砦の駐在員たちは、モスクワから穀類の配給を受けるようになった。クリミア戦争時、ロシア帝国は国家としてこのような城砦の軍事強化を図り、

ニコラエフスクやペトロバヴロフスク軍港といった軍事拠点をイギリスやフランスから防衛するために要塞機能を強化した。ムラビヨフ提督によるウラジオトク征服は、こうした一連の東方探險と遠征過程の最終段階で登場してきた出来事なのである。<sup>26)</sup>

#### ④ロシアの産業近代化、鉄道と都市建設

既述のように、クリミア戦争（一八五三）での敗北を契機として、ロシアはヨーロッパ列強の中から脱落してしまうのではないかとという危機感が論じられ、近代化の一環として、ロシアは産業化や社会の改革に力を注ぐようになった。一八六一年の農奴解放と、一八六四年のゼムストヴォ機関設置により、農民に対しても地方政治に一定程度参加させる動きが出てきたのも改革の表れの一つであった。<sup>26)</sup>

一八六〇―七〇年代前半に、近代化政策の一環としてロシア政府は、鉄道と鉄道関連産業の直接支援に着手した。鉄道は、近代技術と近代産業の象徴であった。政府は、外資と外国技術導入によって、一連の鉄道会社の設立を認めた。鉄道は、一体としてのロシアの国民経済空間を育成し、大量の労働者を雇用し、鉄道関連の鉱工業（ドネツ石炭採掘、レール、機関車製造等）を発達させた。政府は、車両やレールの国産化を図るために、国家発注を行い、資金を援助し、国立銀行による定款外の貸付を認めた。このように、ロシアの鉄道関連産業への外資導入、国家的な援助と産業保護育成によって、十九世紀末から二十世紀はじめにかけて、ロシアの諸都市は近代的な鉄道網によって結ばれ、市場と原材料採取地、工業地帯と炭田などが連結されるようになった。ロシアの鉄道関連産業の育成は、国家財政における鉄道投資の比率に現れている。例えば、一九〇〇年には、財政歳入の二五％を鉄道に投資していた。<sup>27)</sup>

一八九〇年代半には、政府は、鉄道に関連して特に鉄鋼業を保護・育成し、フランスやベルギーから外資を導入し、新しい製鋼技術を取り入れ、鉄鋼業は急成長した。そのほか、鉄道や鉄鋼業の発展に関連して、石炭業、特にドンバス



の炭田も採炭量を増加させていった。バクーの石油業は、スウェーデンやイギリス、フランスの資本が流入し、産油量が増え、灯油輸出を増加させた。<sup>78)</sup>

十九世紀末から二十世紀初めにかけての経済建設で、非常に重要な役割を果たしたのは、蔵相ウィッテである。彼は、民間の企業家育成を国家目標であるロシアの近代化路線に乗せ、急速な工業化によって国民経済として一体的な国内市場統一を保つには、絶対権威としての皇帝とそれを支える有能で開明的な官僚の存在が必須であると考えていた。<sup>79)</sup>

第一次世界大戦直前までにおけるロシアの一定の近代化は、工業化を伴い、農民の都市への出稼ぎ労働の機会を増やしていった。農民は、土地不足と重い納税負担のために、二十世紀初頭、彼らの半分以上は農業外の労働などにたよるざるをえず、辺境や海外へ移住を試みる者、借地や土地購入によって農地の拡大を図ろうとする者、自家農業以外の副収入として都市への出稼ぎをする者が、多数いた。特に都市での農業外の副業収入は、長い冬の農閑期や領主への年貢支払い、鉄道網整備による都市へのアクセス改善などを背景に、都市への出稼ぎをもたらした。これらの出稼ぎ労働者の大半は、都市の雑業労働（例えば、建設労働、商業、召使、日雇い雑役等）にたずさわっていた。彼らは、都市への定住ではなく、担税能力確保に連帯責任を負っていた農村の共同体社会とのつながりを、依然として維持していたといふ。ときには、都市の出稼ぎ農民は、都市から家族に送金し、送金額のうち共同体の税負担分は源泉徴収されることもあった。<sup>80)</sup> 土地の私有化の承認と共同体的な土地所有の否定を認めたストルイピンの農業改革以前の時期には、特にこのような非定住型の出稼ぎ労働が盛んであったのであり、ロシアの都市人口は季節によって変動した。このことは西ヨーロッパの都市民が、農村から離れて法的に自由民とされたこと、さらに都市の成熟と農村からの明確な分化といった面で対照的である。すなわち、帝政末期、ロシア主要都市の特徴は、行商人やバザールに象徴されるような雑業部門の横行と少数の銀行、国際取引企業など近代産業部門という二重の経済構造をもっていたことである。

いずれにせよ、鉄道建設は、都市形成に非常に大きな役割を果たしたとみられる。鉄道網の発達によって、都市への

食糧供給は、飛躍的に向上し、都市の商業を發展させ、物資の流通や都市建設労働を担う流動的な雑役労働人口の移動を助けたのである。<sup>(81)</sup>つまり、十九世紀後半から二十世紀初めにかけてのロシアの産業近代化と都市の發展は、農村から出稼ぎ労働者を都市の雑役労働にひきつけたといえるであろう。一方警察当局は、都市の無秩序に対する危険と治安維持に頭を悩ませることになった。例えば、一八六四年という帝政末期の人口調査によれば、サンクト・ペテルブルクにはヤロスラヴリ、トヴェーリ、プスコフといった周辺の比較的貧しい農業地域から出稼ぎ労働者が工場労働者として流入していたことがわかつている。

主要な都市には、機械化された繊維工場が立ち並び、例えば一八八〇年代初頭のモスクワの繊維産業は五九の企業と一、五〇〇人の労働者を抱え、機械工業は八、〇〇〇人の労働者を雇用していた。既述のとおり、大都市の大型商業や工業施設の周辺には同時に、物々交換やバザールの喧騒、露店など前近代的な街の風景が見られた。都市の経済は、一握りの富裕な商人や有産階級と貧しい農村からの大量の出稼ぎ労働者という階層的な社会から成り立っていた。鉄道建設にはじまる一八六〇—七〇年代以降のロシアの経済發展は、このような都市の二重経済構造を内部に抱えていたのである。<sup>(82)</sup>都市人口は十九世紀後半に五二〇万人(二八五六)から二二二〇万人(二八九七)へとほぼ倍増した。<sup>(83)</sup>都市人口増加の多くが周辺農村からの流入であった。そして、都市における出稼ぎ労働者のたまり場がスラム形成を促した。例えば、一八八二—一九〇二年にかけて、モスクワの人口の約四分の三が出稼ぎ労働者であり、五分の一が居住二年未満であった。つまり、都市には出稼ぎ労働者が多く、非定住型の暫定人口が相当数いたことがわかるのである。<sup>(84)</sup>出稼ぎ労働者の大半は、二〇—四〇歳の生産労働人口に属し、彼らの多くは低廉な家賃で知られる長屋形式の木賃宿に住んでいた。皇帝と政府当局は、このような出稼ぎ労働者の急激な流入に懸念を示し、彼らが都市の治安維持を乱す政治的に危険な要素であるとなしていた。<sup>(85)</sup>一八六〇—八〇年代の経済成長期には農村から都市への流入数は三倍に増加し、八〇年代末に三五〇万人の出稼ぎ労働者を記録している。<sup>(86)</sup>一般に帝政期のロシア諸都市への移動は、農民に内国パスポート

トが義務付けられていたが、流入する都市人口の相当な部分がパスポートなど法的に有効な書類を所持しなかったのである。都市流入人口の膨張とともに、貧民地域の衛生状態やコレラ等伝染病対策が問題として、当局から取り上げられ、貧民巢窟の隔離が都市問題として取り出された。<sup>87)</sup>

さらに、ロシア帝国の膨張とともに、サンクト・ペテルブルク、モスクワなどの大都市には、中央アジアその他の少数民族が入り込み、ユダヤ商人とともに、ロシア都市における民族差別の対象となった。特にユダヤ商人は、民衆から「ユダヤ人によるロシア侵略」と非難され、都市で暴動が起こった際には攻撃の対象となった。<sup>88)</sup> 十九世紀末から二十世紀初めにかけてロシアの都市でこれらの暴徒が騒ぎ出した理由の一つは、商人が出稼ぎ労働者の生活を法外に高い商品売りつけることによって脅かしているのだけしからぬという理由であったが、真偽の程は定かではない。<sup>89)</sup> エカチエリーナ二世が、モスクワ商人の訴えを聞き、ポーランド分割後の一七九一年に強力な商売上のライバル、ユダヤ商人をポーランド国境地域や黒海の北側に限定居住させて以来、ユダヤ人敵視の風潮がロシアに定着しつつあった。しかし、一八五九年以降、アレクサンドル二世の改革時代のなか、ユダヤ人はロシア帝国内の限定居住区域から離れ住んでもよいとの許可が出されるに及んで、ロシアの都市化進展とともにユダヤ商人の大都市移住がすすんだものとみられる。<sup>90)</sup>

既述のように、急速な産業化の影には、都市空間が流入人口の増加とともに社会不安の舞台となり、一八七〇―一九〇年代に都市における暴徒取り押さえとストライキ鎮圧のために、軍隊が介入することも頻繁にであった。<sup>91)</sup> この背景には、主要都市における工業と農村社会の構造が、定着型の移住者を生み出しえなかったことが挙げられよう。つまり、ロシアの産業化は農民の安定的な恒常雇用を生み出しえず、鉄道建設も鉄道敷設とともに最終的に解雇せざるをえない状況であったこと、さらに農村社会とつながりを維持した農民が、ルンペン・プロレタリアートとして日雇い雇用の雑役労働に従事せざるをえなかったことに、問題の一端があるのではないだろうか。

### ⑤ 第一次大戦の勃発、ロシアの戦時動員体制とゼムストヴォの変容

既に述べたように、クリミア戦争後、ロシア近代化政策の一環として、地方行政改革がゼムストヴォとして導入された。そのゼムストヴォを動かしていたのは、貴族から転身したものや雑階級としてのインテリゲンチアの存在であった。彼らは、郡や県といった地域レベルでの政治、行政に献身的に関わっていた。貴族身分から大学教授、弁護士、医者などの自由業従事者が輩出され、このような転身インテリゲンチアはゼムストヴォの牽引車として活躍し、農村の学校教育、医療、道路管理、保健、産業振興・農地改良等のために貢献した。彼らは、近代化の波にあつて、国政よりもむしろ地方行政、地域経営の問題にかかわり、過度の中央集権と官僚主義を批判した。<sup>92</sup>

地域の自発的な活動団体といった性格を持っていたゼムストヴォであつたが、第一次世界大戦の危機が目前に迫ると、国家は、ゼムストヴォを含む既存の社会組織や団体を、戦争目的の動員体制に組み込んでいった。ゼムストヴォは、農村工業の振興を軸にして、軍需製品の製造への参与へと駆り立てられるようになり、皇帝政府は開戦と同時に軍用の食糧調達、銃後に残された兵士家族への援助等をゼムストヴォに負わせるようになった。ゼムストヴォは、具体的には一九一五年には軍需生産のための農村工業の組織化、難民援助を、一九一六年には砂糖配給制に伴う事務手続き、全国農村統計調査事業などに動員されるようになった。国はそればかりか、国税徴収、警察機能、移民事業といった従来地方行政機関が国政の一端として行つていたことを、ゼムストヴォに移すとともに、ゼムストヴォの県会や郡会に地域住民への命令権限を付与した。こうして一八六〇年代以降、地方自治の一端を自発的な活動として担つていたゼムストヴォが、文字通り、国家行政の一機関に変貌していった。<sup>93</sup>これらの現象は、次にみるスターリン体制になつてからより鮮明に現れてくるものであり、地域社会全般で見られたことである。

## 六 スターリンの戦時動員体制と都市・地域開発

### 1 戦時動員体制のはじまり

第一次世界大戦後から第二次世界大戦開戦にいたる戦間期の時代は、冷戦期にも延長、継承される戦時動員体制のはじまりの時期である。ここでは戦争遂行のための国家による資源動員体制について説明することにする。

日露戦争で大敗を経験したロシアは、改革を余儀なくされた。その一つの表れとしてロシアは、一九〇六年に国会開設に見るとおり、外見的な立憲制に移行したが、これも都市民中間層が薄いことから長続きせず、第一次世界大戦がはじまると、国会と政府による戦争協力体制に入ってしまった。カデット（立憲民主党）は国会でしばしば自由主義インテリ勢力として活躍したが、戦争という非常事態の状況下でやがて政府攻撃を中止するようになり、指導力を失うようになった。その結果、専制打倒をうたった二月革命を経て、臨時政府連立政権からブルジョワ政党指導者が退くにいたって、ボリシェビキが率いるロシア十月革命（一九一七）が勃発することになる。二月革命後の八ヶ月の間に、四つの内閣が入れ替わったことは、端的にロシア社会における中間階層の薄さを現わしている。

ソビエト政権が、史上初めての社会主義政権として、戦間期に登場したことは、ロシアがブルジョア敵対国家の包囲網下に戦争統制経済（いわゆる、動員体制）を導入する大きな転機となっていた<sup>95</sup>。一党独裁と軍事重視の官僚経済に特徴付けられるこの体制は、外国との経済関係、思想統制、企業の国営化等をすすめていった。一国社会主義の建設というスターリンの典型的な動員体制は、大衆団体を被管理・動員の対象として捉え、社会において各種の資源や人材を

戦争や政治目的のために管理・操作しようとするものであった。例えば、スターリン時代に、マガダンなどシベリアや極東の辺境地域の都市開発に精力的に駆り出されたコムソモール（青年共産主義同盟）なども、被管理大衆団体の一つであろう。<sup>96</sup> Solnick S. I.は、第二次世界大戦を通じてコムソモールや軍建設隊の活動と組織が、飛躍的に増大したことを指摘している。コムソモールは、厳しい条件下でのバム鉄道の建設を行ったことで有名であり、軍建設隊は、チェルノブイリ原発事故後の清掃作業での「危険をも顧みない献身的な活動」で有名である。<sup>97</sup> つまり、これらの事例のように、戦時動員体制は本来自律的であるはずの団体を被管理の大衆団体として取り込んでいったのである。Kasza G.は著書「大衆動員社会」のなかで次のように述べている。少し長くなるが、重要と思われるので引用する。

「戦争が被管理大衆団体の創設を早めた。……一九一八から一九二二年までの時期に（ソビエト）政権は、徴兵制を支えるために労働者や青年の民間団体を利用した。その過程でこれらの民間団体は軍事方針に沿って再編され、持続的に国家管理的性格を帯びるようになった。一九一八年、内戦がはじまると、労働組合は労働者の徴用だけでなく徴兵のための道具となった。……一九一八年から一九一九年にかけて政権は産業労働力そのものを徴兵方式で調達することとし、労働者を徴用して、次つぎに様々な産業の仕事に常時彼らを配置した。労働力動員の指揮をとった陸軍人民委員レオン・トロツキーは、自分は陸軍をモデルにした、なぜなら、『多数の大衆の登録、動員、組織化および移動』の経験があるのは陸軍だけだからだ、と述べた。……このようにして、ポリシェビキが労働組合を政権の公認部門に変えたことにより、戦時下の動員は新たな水準に達した。……ソ連では一九二〇年から一九二一年にかけて徴兵と徴用が重複するようになった。政権は工場に部隊を配置し、民間労働力を軍隊化するという全般的政策を採用した。……青年の被管理大衆団

体であるコムソールもまた、徴兵のための補助的団体として実現した……」。(98)

この戦時動員体制は、第一次世界大戦や第二次世界大戦後も残存するばかりか、冷戦期を通じて東ヨーロッパ社会にも類似の体制を移植し再生産した。(99) では、戦時経済体制ともいべきシステムは、どのようにして平時でも維持されていたのだろうか。いくつかの手段があるが、次のようなものが考えられる。(100)

第一に、国家が都市に住む民衆に対して、一定程度の食糧、住宅、衣料や医療サービスなど日常必需の財・サービスを提供し、年金や安定的な雇用など生活を保障することによって、物質的に依存させ政治的に従順にさせる。つまり、犬が主人に噛み付かないように、パンを与えるというわけである。

第二に、自主的な市民活動、公共活動に活動の余地を与えないようにするため、行政機関の統制や官僚的統治によってこれらの活動に時間とエネルギーを注ぐ余地を与えない。国家は、被管理大衆団体を通して大衆を国家機関への依存状態に置き、いつも多忙にさせておくことよって時間やエネルギーをそぎ、自主的な市民活動に使える時間と労力を少なくさせる。

第三に、国家が警察や軍隊など暴力装置をいつでも使用できる用意があること、権限があることを大衆に理解させることよって、政権転覆という革命を事前に防ぐ。

第四に、国家は不満分子に擬似的な政治活動にあずからせ、鬱憤晴らしの機会を与え、実際に政治に参加して社会を変えているのだという錯覚を起こさせ、自立的な市民の政治活動と急激な変革を防ぐ。

このように戦争経済の常態化は、臨戦に備えるすべての社会活動、機関、思想、文化を含む。すなわち、動員経済体制は戦時・平時においても機能し、我々は平時における状態のほうがむしろシステムの存在と管理されている事実を容易に気づかないのである。

## 2 動員体制と都市・地域の開発

では、この体制は都市や地域開発とどのようにかかわるのだろうか。

第一に、国家による戦争遂行と銃後を支える社会や経済の発展に必要な産業施設は、敵の攻撃による壊滅から守るために国境地帯から遠方の内陸部に立地させた、ということがあげられよう。これは、いわゆる都市建設・地域開発における地政的な配慮とも呼ぶべきものである。これは、スターリンが独ソ戦に欧露部の工場と労働者をシベリアに集団疎開させたことからわかる。

第二に、ブルジョワ国家に包囲された緊張状態で、経済は国家の政治目標に従属され、民需部門よりも重化学工業など軍需部門が優先された。また、工業化と都市・地域開発は国有生産・流通部門による中央統制型資源配分に依存していた。これは具体的には、カザフスタンや中央アジアなど旧ソ連の後背地において農業集団化を実施し、管理下に置いたうえで農業者を重工業に集中的に投入することによって、近代部門発展のための投資資金を確保したことからもうかがえる。

さらに貿易など対外経済活動は、国家によって一元的に管理され、資源輸出によって外貨を稼ぐとともに、重工業部門への投資資金を獲得するための手段となっていた。ソ連の国民経済はこの国家の貿易独占という方法によって、世界経済から分離させられていた。これは、国家による貿易管理は、シベリア・極東地域の内国植民地化をもたらし、欧露部の発展を財政的に支えつづけた、ということからもわかるであろう。

第三に、資源の乱脈開発をすすめる国の辺境部分に十分な投資をせずに、単に資源を収奪させる目的で、中心部からより近い西シベリアからはじめて、空間的に広い範囲にわたって投資を拡散させ、資源収奪用の施設を建設していった。



これは現在のシベリアや極東地域のインフラ施設の劣悪さからも理解できる。電気が常時通らない、お湯が出ないなど、現在でも問題が指摘されている。

第四に、既述のように、都市・地域開発において地政学的配慮がなされ、辺境の国境地帯に軍事施設、軍人家族が方々に分散・配置されることよって国土を防衛しようとした。このために辺境地の都市建設は、隣国との人口バランスを考慮して、行われた。これはウラジオストクやサハリン諸都市など、軍人家族に赴任に際しての一定の特典を与えていたことからわかる。

第五に、隣接する敵対的な国・地域との国境地帯に居住していたドイツ人や朝鮮人など少数民族を、中央アジアの農業集団化に組み込むことよって、民族構成を操作し、安全保障上の配慮から国境地帯を政治的に安定化させる。

第六に、都市の経済成長や社会資本整備は、計画型統制経済のため国家投資によつて遂行されてきた。このため、生活必需品である重要消費財は補助金によつて安く価格が設定された。また、市電などウラジオストクなど一部都市では都市の公共交通機関のサービスは無料であつた。

### 3 社会主義政権下の都市建設

ソ連は、資本主義の結果、生ずる都市への流民とスラム形成に対して、否定的であつた。社会主義都市の特徴の一つは、このような「過剰都市化」を防ぐために内国パスポートとプロピスカの導入によつて、農村からの無制限な流民の流入を防ごうとした。このパスポートの仕組みは、財・サービス不足の中にあつて居住者の日常生活必需品やサービスに対する権利も含まれていたものである。パスポートがなければ、住宅入居の権利や食糧の配給の権利もないのである。

また、都市中央には、権力の象徴として革命に関連する巨大なモニュメント（モスクワの赤の広場など）が配置さ

れ、党機関や国家機関が立ち並び、市民の経済機能を果たすスーパーや百貨店のような流通機能の果たす役割が、相対的に低かったといえる。

### ①モスクワの都市改造

革命後、ソ連では一九二六―七一年の間に都市数は七〇六から一、九四三に急増した。また、このように新しい都市の建設とならんで、帝政時代からの古い都市の改造が大規模に進められた。<sup>(10)</sup> 例えば、モスクワを例にみてみよう。第二次世界大戦後、スターリンは、都市と農村、工業と農業の対立はソ連では解決されたと、政治宣伝を行い、モスクワの都市改造に着手した。革命後の宗教弾圧下にあつて、モスクワの各種正教会寺院建築は次々に破壊されていった。その昔、十六―十七世紀のモスクワは二千以上の教会が立ち並ぶ正教の街であつた。しかし、ソ連政権になると、救世主キリスト大寺院爆破の事例のように、聖堂の廃墟跡にソビエト宮殿を建てようとしたという。結局、政局は対独戦の最中であつて、宮殿建設のプロジェクトの方は頓挫してしまつた。ちなみに、一九二〇年代半ばには、このように破壊された寺院の数は、一〇ヶ所近くに上がったという。革命後、モスクワは世界共産主義革命のメッカとして世界に知らしめねばならない街として、一九三四年までには約七〇の寺院等伝統建築が撤去され、二二〇が破壊されてしまつた。ロシア革命後、モスクワの美的景観を維持してきた寺院等伝統建築が、都市改造の美名のもとに破壊されつくし、都市の景観を全く変えてしまつたことは間違いない。<sup>(10)</sup> さらに都市景観の改造とともに、モスクワの都市人口が抑制された。一九七一年のモスクワ都市総合計画によれば、最高八〇〇万人としてそれ以上増やさないとしたのがそれである。<sup>(10)</sup> これも上述の「社会主義のショーウィンドー都市」として外国からの訪問者に印象付ける意味合いがあつたのかもしれない。

一九二〇年代末にはじまつた国際政治環境の悪化と重化学工業化路線によって、モスクワでも、穀物調達の非常措置がなされた。第二次世界大戦を控えた一九三一―四年の時期は、特に厳しく、スターリン指導による「上からの革命」

に伴う農業集団化と重化学工業化を受けて、物不足と戦争の兆しが見え隠れする危機の時代となつていった。ソ連をめぐる国際政治の環境がこの時期に特に厳しかったことは、一九三一年に満州事変、一九三二年にソ連極東にとつて脅威となる満州国の成立、一九三三年にはヒトラー政権の誕生など、ソ連の東西で緊張が高まつた時期であることから、明らかであろう。既に述べたように、「文化革命」の美名が虚ろに叫ばれるなかで、救世主キリスト寺院やイベリアの処女チャペルその他の壮麗な寺院等伝統建築が取り壊され、モスクワは、従来の繊維、軽工業の中心、正教会の街から金属機械の街、共産主義政権の牙城と変化していった。<sup>⑩</sup>一九三一—四年には、商人たちは、減少の一途をたどり協同組合や国営の偽物労働者となつた。一九二八—九年にその三分の二が姿を消し、一九三二年には完全に消滅した。NEP時に増加した小企業家も各種行財政措置によつて次々と抑圧されていった。<sup>⑪</sup>

カガノビッチは、一九三一年、ソ連共産党中央委員会でモスクワの都市問題を指摘し、「社会主義都市の実験」を訴えた。このような政治状況のもとで、新運河や地下鉄が建設され、上述のような文化財の破壊が行われた。<sup>⑫</sup>戦争の危機と国益優先という状況で、公共投資のうち住宅投資は一一・四％（一九二八）から八・六％（一九三一）に減少していった。<sup>⑬</sup>都市の産業政策の意思決定は中央政府で決められその履行と統制維持のみが州、地方の指導者に任せられた。モスクワではパンの配給が一九二九年にはじまつた。その後、配給品目は一九三〇年以降、砂糖、バター、食肉、紅茶などへと拡大していった。こうして不足する生活必需品は中央当局の配給するところとなつた。中央政府は食糧、必需品などの供給に対する統制を行うことによつて住民生活を管理下に置き、このような配給制は飢餓・物不足の状況にあつた当時、支配の正当性を維持するうえで政治的にきわめて有効な手段であつた。<sup>⑭</sup>一九三二年には、モスクワに内国パスポートの制度が導入されて、都市流入が制限され、生産、学校、産業施設等で労働に従事せず寄生的な生活を送るものを除去し、犯罪者、反社会分子などを暴露しようとした。しかし、実際には農業集団化と一九三二—三年の飢饉の結果、流民が増加し、モスクワなど主要な都市に流入する者が増え、中央政府は、下流ヴォルガ農村地帯からの流入を防

ぐために、鉄道切符の販売を禁止するという措置に出たこともあった。<sup>⑩</sup>

中央集権型の経済管理制度が形成されると、モスクワ市における企業の長は、党中央委員会の承認を経なければ任命されず、企業経営は中央によつて管理されるようになった。ここに党の指令は、市場機能に変わる役割を果たし始めたのである。<sup>⑪</sup>しかし、こうした中央統制の反面、中央が国家的事業に忙殺されていたおかげで、実質的にはモスクワの都市経済の管理・運営は中央から指示がない状況となり、必要ならば、住宅建設などの面で市独自の創意と工夫を凝らさなければならぬ場面もあった。<sup>⑫</sup>

## 七 冷戦後・連邦崩壊後の都市・地域の変容

### 1 動員経済体制離脱への試み

さて、ここまでソビエト時代の都市・地域の様子を説明してきたが、一九九一年末の連邦の崩壊以降、ロシアは、どのように変化したのであるか。その前に冷戦後の動員経済体制の変化について概説しておく。結論から手短に言えば、動員経済体制のほころびがゴルバチョフ政権末期から見えはじめ、第一に、労働力は国有部門から民間部門に移動し、近代的産業の未熟といった背景から労働力が非公式の就業という形態をとらざるをえないこと、第二に、一挙に失業率が上がると政治的ナリスクが高いために、国有部門で隠れた失業という形態をとり、一定程度、何らかの補助金や財政支援が支払われている、ということがあげられる。<sup>⑬</sup>

それでは、動員経済体制がほころびを見せるなかで、現在のロシアはどのように変化しているのだろうか。以下のよ

うにいくつかの点が指摘できる。

第一に、重工業と軍需部門優先から流通業など、民間部門をより重視した経済の方向に変わりつつあること。

第二に、経済活動は閉鎖的な国民経済から国境を越えて取引されるようになってきていること。

第三に、州や都市など地域単位で直接、外国貿易に参加するようになってきており、ロシアの貿易活動は、その主体においてより多様化するようになってきたこと。

第四に、閉鎖経済と軍事力の象徴であった国境付近の軍事都市が、市場となり、国境を越えた少数民族などのネットワークによって対外的な商業活動を展開するようになってきたこと。

第五に、国有経済部門の停滞と給与不払い・遅延による副業、アルバイトの横行、などである。

## 2 モスクワ・サンクト・ペテルブルク両市における雇用労働力、住宅事情市場

では、ロシアの都市では連邦崩壊を受けてどのように変わったのであろうか。ここでは事例研究として、主としてサンクト・ペテルブルクやモスクワという主要な都市を扱うことにしよう。

これらの大都市では、国家の流通機構が民営化により解体されて、各種の民間流通サービスが相対的に増えた。サンクト・ペテルブルクでは七五%の小売商業と飲食サービスが民営化され、モスクワでは三分の二が民営化された<sup>13)</sup>。規制緩和が比較的、早くなされた流通サービス業では、国有部門から民間部門への労働力の移動が早かった。サンクト・ペテルブルクでは一九九一―二年という短い期間に、民間部門の雇用人口比率が、八倍以上に急成長し、全雇用労働人口の一五・四%になった。モスクワでは一九九二年だけで、民間部門の雇用人口比率は全雇用人口の二七%にもなった<sup>14)</sup>。

モスクワの事例をもう少し詳しく見てみよう。モスクワにおける非国有部門で働く労働者の割合は、二二%（一九九

一) から二七% (一九九二) に増加した。このうち、多くの人が露天商など、いわゆるインフォーマル・セクターのサービス業に就いたと見られている。一九九五年の統計調査では、連邦崩壊後数年にして、既に六〇%の小売業と消費者サービス労働者が、民間部門での仕事に就いていたことが判明した。露店を街路で構え個人商売で収入を稼ぐのは、まさに共産政権の終わりとともに馴染みの都市風景となったのである。<sup>16)</sup>

モスクワのアパートは従来、モスクワ市有・国有・協同組合所有であったものが、一九八九年から一九九二年にかけて民営化されるにしたがって、投機的な賃貸アパート取引の対象となった。市の中心に接近するほど、一平方メートル当たりの賃貸料が高くなり、さらに地下鉄へのアクセスなど交通の利便性も価格に影響した。<sup>16)</sup> また、土地がリースされはじめると、民間のデベロッパーが住宅建設を開始し、都市外縁部周辺に郊外型住宅として建設するような動きもみられるようになった。<sup>17)</sup>

### 3 貿易都市の変容

サンクト・ペテルブルク、ウラジオストクなど国境を接する軍港要塞都市は、外国との貿易で賑わっている。これらの都市を中心に、西ヨーロッパ、米国や日本その他から消費財や食料品が輸入されている。繊維製品、カラーテレビ、VTR、パソコンなどの家電製品、コピー機等の事務用機器、RV車などが、大量にこれらのロシア貿易都市を経由して国内に流通している。<sup>18)</sup> 現在は、ニューリッチたちの購買力を背景に、高級品志向の市場については西側先進工業国の製品に全く席卷されている状態である。一方、一般庶民用の廉価製品市場は、安価な繊維製品や革靴など圧倒的大部分が中国製品に支配されている。<sup>19)</sup>

サンクト・ペテルブルクなど経済力のある有力諸都市は、従来の中央政府からの補助金への依存ではなく、外国で独

自に資本を調達できるようになり、一九九七年にはヨーロッパ市場でユーロ債発効に成功した<sup>(120)</sup>。これらの都市は、外国との情報通信・ビジネス上のコミュニケーションを迅速にするために、電気通信・情報インフラに対する投資が日本や米国、ヨーロッパ諸国からなされ、最新の技術・整備が投入されつつある<sup>(121)</sup>。

バルト海地域の貿易都市は、西ヨーロッパとロシアとの中継貿易で歴史的に栄えてきた。ラトビアのベントスプリス港などは、ヨーロッパとロシアのトランジット貨物の取り扱いで繁栄し、現在、貨物量でロシアのサンクト・ペテルブルク港をもはるかに凌いで、バルト海地域最大の貿易港のひとつとなっている<sup>(122)</sup>。

## 八 まとめ ロシアと西欧の都市

### 1 戦時動員体制の盛衰

これまで述べたように、第二次世界大戦後、国家は、大衆社会の到来により福祉政策、辺境地開発、その他の国家プロジェクトに経済的・人的資源を動員した。軍事官僚国家は「市民」団体を御用団体として利用し、大衆を管理し、真の市民社会の活力を奪ってきた。本稿の後半部分ではスターリン型の動員経済体制をその一つの例示として説明した。スターリン型動員経済体制の原型は、第一次世界大戦後に形成されてきた。特に国際政治環境の厳しかった一九二〇年代末から一九三〇年代初めにかけての時期に、重化学工業化が共産主義建設のための最優先課題とされた。工業化のための原資を農村から収奪、獲得し、増大した都市人口を養うために、農村の集団化により都市への食糧抛出、農村余剰資本の重化学工業部門への移転を基礎に強蓄積を行ってきた。これが、ソ連の戦時動員経済の原型である。スターリン

政権は、中央アジアの草原を穀倉地帯に変えるために、遊牧民族であつたカザフ人を定着させ、農業に従事させようとしたが、カザフ人は伝統的な生活様式を変えようとはせず、中央は、さらに彼らから家畜を奪い、国境間の移動を禁じ、多数のカザフ人が飢えと疫病のなかで死んでいった。一方、都市の共産党エリートは、様々な特権に守られ、飲食と生活を保障され、共産主義支配の正当性はここに維持されてきた。<sup>(23)</sup> 社会主義政権の下では国家機関の立地が共産党と中央政府の管理の下に置かれており、これらの機関の集中する都市の経済活動は政府の統制下に置かれた。ソ連は、コムソモールや軍建設隊など、被管理大衆団体を動員し、マガダンをはじめシベリアや極東地域など辺境にまで都市を建設した。地政学的な視点から重要な軍需工場は、敵の攻撃をかわすために分散され、特に国境地帯への立地は避けられた。ウラジオストクなどの軍港要塞都市は、外国人立ち入り禁止、ソ連人でも特別の許可がなければ立ち入ることのできない閉鎖都市となつた。

しかし、ゴルバチョフのペレストロイカとエリツイン政権の市場経済への移行戦略路線のもとで、従来の常態化した戦時経済の仕組みがほころびを見せはじめると、国境付近の諸都市が、貿易をはじめ外国から資金を調達し、一般庶民が副業として商業やサービスに精を出すような時代になつた。ロシアは、十分な民間産業基盤が欠如したまま、街のなかに露店や青空市場がならぶようなバザール経済の観を呈するようになってきた。しかしながら、二〇〇〇年現在、このようなバザール経済、インフォーマル経済の横行はロシアの再工業化と産業発展を創出するような刺激とはならずにいる。<sup>(24)</sup> すなわち、ロシアの都市発展の方向はまだまだ混乱のままだということが言えるだろう。

## 2 ギリシャ・ロシア正教会の経済倫理と世俗労働——ウェーバーの命題の検討

マックス・ウェーバーによれば、西ヨーロッパ都市のみが高度の自治の経験を持っていたのであり、西洋以外のところ



るに都市の自治はなかつたといふ。<sup>(125)</sup> マックス・ウェーバーの都市類型からすれば、ビザンチン・ロシアの都市は東洋都市といふことになるが、東洋で都市の自治と市民社会形成を阻害した要因として、軍制と呪術からの未解放を挙げた。ビザンチン・ロシアの軍制は、武装自弁の都市民が自らを守るための軍隊ではなく、あくまでも皇帝の軍隊が都市を守っていた。コンスタンティノープルやバロック都市のサント・ペテルブルクは、帝都であつて都市自らの軍隊を持つてはいなかつた。また、この二つの都市の起源は皇帝の意思による遷都に基づくものであつて、皇帝の権限のもとに臣下の賦役と一般民衆の労働力提供を強いることによつて建設されたものである。帝政ロシアとソ連の両政権は、西ヨーロッパに対して威信を維持するために、軍事力が増強され、軍需関連の生産は民需部門を圧迫し、その潜在的な発展の可能性を摘み取られていた。この戦争経済のもとでは、国家が、大部分の軍需製品の発注者・消費者であり、その競争は企業間ではなく、<sup>(126)</sup> 国家間で行われた。ソ連時代の軍需関連支出は統計によつては国家予算の半分以上を占めていたとする説があるほどである。

ビザンツもロシアも皇帝教皇主義のもとにあり、都市は、宗教的に神の前に平等な兄弟が、契りを結び築いた誓約団体を基礎に発展しなかつたのである。さらに、西欧宗教の場合、神の前で異なる氏族・種族・民族が相互に交流を図るうえで呪術的な障害がないのに対して、東方宗教の場合、ビザンツ皇帝の聖俗両権支配やピョートル大帝の宗務院制度設置に見る教会の国家への隷属化が起こり、西欧型都市発展の基礎たる構成員間の相互扶助と兄弟的誓約が妨げられた。

### 3 ロシアの市場経済への移行と都市市民社会への展望

さて、目を現代ロシアに転じてみよう。現代ロシアで、はたしてマックス・ウェーバーの言うような資本主義的精神

は根付くのであろうか。メドヴェージェフは、東方正教の伝統を持つロシアについて次のように書いている。

「プロテスタント倫理が一度も存在しなかった所で、この倫理を『復興する』ことはできない。……新しい金もうけの倫理と『資本主義の精神』が形成されるのには、数年ではなく数世紀が必要である」<sup>(17)</sup>。

ちなみに十八世紀後半、デスニーツキイは、イギリスのグラズゴウ大学に留学し、アダム・スミスの思想をロシアにはじめて紹介した。彼は貧農、コサックを中心とする農民の権利を回復させるとともに、商人や手工業者たちに都市の政治・経済政策への積極的な参加を促し、重要な役割と権限を与えることによって独立自営の商人や手工業生産者が自律的に管理・運営する市民社会をロシアに構築することが必要であると、主張した<sup>(18)</sup>。しかし、デニーツキイによるアダム・スミスの翻訳書（『道徳感情論』及び『国富論』）は、その後、無神論の危険があり体制破壊をもたらすものとしてロシア正教会によって禁書処分とされた<sup>(19)</sup>。

メドヴェージェフは次のように述べている。重要なので引用しよう。

「……ロシアでは、生活様式においても国民意識においてもそのような展開は起こらなかった。西欧流の合理主義や金もうけの価値観とはほど遠い倫理を有する伝統的正教は、そのような展開を促さなかった。周知のように正教倫理は、金をもうけようとする事、さらには富そのものをも断固として非難し、無欲、善良、公共の福祉への奉仕、信頼、自己犠牲を奨励する。それだけになおさら、二十世紀に優勢となった社会主義の流れが『資本主義の精神』の確立を促すはずはなかった。……（しかしながら）資本主義発展を促す蓄積、合理化、倹約の倫理を生み出すのはプロテスタンティズムのみであり、すべてのアジア宗教、古代

宗教は資本主義的經濟倫理の發展を妨げ、あるいは完全に排除する、というウェーバーの見解には同意できない。プロテスタント倫理だけが資本主義發展、勤勉と節約の結合、儉約、高い労働能力の基礎にあるはずはない<sup>130</sup>。

メドヴェージェフは、現代ロシアの市場經濟は、國家社會主義の土壤で生まれた官僚出身資本家たちが、社会的な理念と倫理を欠落させたまま、金もうけだけを追及する「新ロシア人」となり、社會主義政權時代から培ってきた個人的なコネクション、情報や賄賂などを基礎にして似非資本主義を形成していると、見ている。まだ、企業家という新しい階級は形成途上についたばかりではつきりしないという<sup>131</sup>。

ロシア人は本来、利潤や物質的な豊かさそのものを絶対目標とするよりも、余暇を通じて文學や芸術に触れ、友人と交わり實際範圍を広げることで精神生活の豊かさを大切にしてきたように思われる<sup>132</sup>。もちろん、西洋先進經濟地域との經濟格差の違いは大きいかもしれない。しかし、我々が議論すべきは經濟倫理の優劣ではない。そうではなくて、ロシアの伝統価値の上にもどるように資本主義の精神が根付くのかという問題である。もしロシア正教が、世俗世界を豊かな精神生活を現わす場所として捉え、人間のなすべき務めは世俗の活動に埋没することなく、その背後に絶対者の摂理や働きを觀想し、世俗での勤勞という価値を否定しないのであれば、それもまた、經濟や社會の發展へとむすびつく考え方となる<sup>133</sup>。おそらく、ロシア正教の經濟倫理は、世俗のただなかでの倫理的・禁欲的な生活態度の実行と合理化という——いわゆる世俗内禁欲の精神——ではなく、正教の奉神礼という儀禮を通して自らの生活をささげ「キリストの體」にある聖なる「生命」との交わりを介し「聖なるもの」に触れ交わることによつて、世俗内の觀想と日常生活の態度全般を、秩序づけることを目指したもののかもしれない<sup>134</sup>。ウェーバーによれば、伝統宗教が世俗の外側での修道生活を重視し、一種の宗教的貴族主義に傾いたのに対し、プロテスタントイズムでは、一般信徒による世俗内での禁欲と

勤労が重んぜられ瞑想よりも「神の栄光を増すために役立つのは、怠惰や享樂ではなくて、行為だけ」であつた。プロテスタンティズムでは特に「時間の浪費が、……原理的にもつとも重い罪」と考えられたのに対し、東方正教会では奉神礼の「聖体」の秘儀に照らして「神の力と働きによつて」キリストに倣つた生活のビジョンを「瞑想」によつて心の内面に映し出し、一定の生活様式を修得することが重要であると考えた<sup>35</sup>。あえて誤解を恐れずに両者の考え方を簡略化するならば、プロテスタンティズムが理知的、自力救済的、行動的なのに対して、東方正教は神秘主義的、他力救済的、瞑想的である。もし東方正教会の世俗世界に対する考え方を、世俗から隠遁して神との交わりを一人静かに求める静的な瞑想と修道と捉えるならば、プロテスタンティズムの倫理が命ずる生活態度の徹底した合理化や資本主義的精神の發展といった動的要素は、ロシア伝統宗教の考え方の中には欠落しており、前近代的ということになる。しかし、もし東方教会の世俗に対する考え方が世俗に埋没することなく、内面から精神生活をみつめ、喧騒のなかに埋没する自己を世俗から解放し、瞑想の中で一步退いて新しい目で自己と他者とのかわりをみつめなおすということであるとすれば、それはそれで物質世界を、超自然的な目で鳥瞰し捉えなおすという別の考え方を提示しているわけである。ポスト・モダンの現代社会に住む我々にとつて資本主義がその宗教的・倫理的な出自を忘れ精神的な生命を失いつつある現在、合理化の果てに物質主義とは別の価値と生命を再度発見することが必要だろう。その意味で東方正教のあり方も、ロシア型社会の發展の方向として何かを提示する可能性を秘めているとみることもできよう。現代資本主義社会において人々の生活は、合理化の末に機械的になり、その結果、人間は精神のない営利を生み出す機械へと墮していつた<sup>36</sup>。ロシアの市場経済への移行についても西欧型の資本主義發展とは別の社会發展のあり方が模索されてもよいのではないだろうか。

確かにロシアは未熟な資本主義社会を内部に抱えている。ロシアは、帝政末期の十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、初期資本主義を経験した後、革命を経て指令経済の経験が長かつたために、基本的には社会と経済における抜本的

な産業革命を経ていないということもできよう。つまり、帝政末期に国家の財政支援によつて織維産業や鉄道関連産業が資本主義社会の萌芽が芽生えたが、その後、ロシアの資本主義経済が自律的な成長を見せ、市民社会の担い手たるべき都市中間層を形成することはなかつたともいえる。レーニンは「都市への出稼ぎは、農民に市民としての性格を強め、農村においてきわめて強い家父長のおよび人格的な従属関係や身分制の地獄からかれらを解放する」と書いたが、その後の共産主義革命では国家と党機関が戦時動員体制のもとで市民社会の発展は窒息させられてしまった。<sup>137</sup> その意味では、現在の市場経済への移行における市民社会の再生という課題は、かけちがえたボタンをけけなおすすめ作業に似ている。

一般にロシアで共同体といった場合、普通は農村共同体を表した。しかも帝政末期には、この農村共同体が出稼ぎ労働者の都市への定着を阻害し、都市と農村を未分化の状態におとしめ、都市市民の共同体の発展を阻害していた。また、スターリンの重化学工業化政策の結果、都市化が進展し、ソ連各地に軍需関連の鋳工業都市が生まれたが、上からの工業化と国家による管理統制経済のもとでは都市における市民社会を形成することはなかつた。移行経済期にあつて、資本主義社会へ向けてボタンをけけなおすすめ作業の中で、担い手となる都市中間層の存在は、重要である。市場経済への移行の中で、以前に国有企業の経営者であつた者、党実務官僚だつた者などが、転身し、新興ブルジョアジーとして都市中間層に発展していくのか、また、彼らが旧ソ連の国家資産を利用して外国と貿易し、資本を蓄積し、やがては資本主義社会を構築していくのかどうか、といった一連の問題は、いまだ釈然としない。

ロシア正教の伝統的な価値からみた社会や経済など世俗世界に対する倫理、とりわけ、労働と余暇・祝祭の積極的価値、世俗内での勤労と瞑想との関係、それらの社会に対する影響などが究明されるべき今後の研究課題となろう。ロシア人は本来、利潤そのものよりも余暇を通して、文学や芸術に触れ友人と語り合い、交際範囲を広げることで精神生活の豊かさを持つ工夫をしてきたのかもしれない。<sup>138</sup> 連邦崩壊後、ロシアの人たちが正教会に顔を出し自由に礼拝に参加す

ることができるようになった現在、市民社会の土台である宗教・経済社会の倫理、都市中間層と都市共同体関係などの一連の研究課題は一層重要性を増しているものと考えられる。<sup>⑧</sup>

## 注

- (1) 橋口倫介『中世のコンスタンティノープル』講談社学術文庫、東京、一〇二頁。
- (2) 前掲。一〇二頁。
- (3) 渡辺金一『中世ローマ帝国』岩波新書、一九八〇、四三―四四頁。
- (4) 前掲。四六頁。
- (5) 前掲。七二頁。
- (6) 植田樹『最後のロシア皇帝』筑摩選書、一九九八、七九頁。
- (7) 前掲。八〇頁。
- (8) オットー・ブルンナー(石井紫郎・石川武・小倉欣一・成瀬治・平城照介・村上純一訳)『ヨーロッパその歴史と精神』岩波書店、一九七四、三三〇―三四一頁。
- (9) オットー・ブルンナー、前掲三五四頁。
- (10) 前掲。三六一頁。
- (11) 前掲。三六一頁。
- (12) 高橋保行『ロシア精神の源』中公新書、一九八九、一三四頁。
- (13) 前掲。渡辺金一『中世ローマ帝国』、四二―四四頁。
- (14) 渡辺金一『ビザンツ社会経済史研究』岩波書店、一九六八、一〇七頁。

- (15) 前掲。渡辺金一『ビザンツ社会経済史研究』、一一〇頁。
- (16) 前掲。渡辺金一『ビザンツ社会経済史研究』、一一〇頁。
- (17) 前掲。渡辺金一『ビザンツ社会経済史研究』、一一二頁。
- (18) 前掲。渡辺金一『ビザンツ社会経済史研究』、一一六頁。及び前掲。橋口倫介、一一〇頁。
- (19) 前掲。渡辺金一『ビザンツ社会経済史研究』、一一八頁。
- (20) 前掲。渡辺金一『ビザンツ社会経済史研究』、一二〇頁。
- (21) 前掲。渡辺金一『ビザンツ社会経済史研究』、一三一頁。
- (22) 前掲。渡辺金一『ビザンツ社会経済史研究』、一三九頁。
- (23) 尚樹啓太郎『ビザンツ帝国史』東海大学出版会『二四四頁。
- (24) 前掲。尚樹啓太郎、二五二頁。
- (25) 前掲。尚樹啓太郎、二五七頁。
- (26) 前掲。尚樹啓太郎、二五八頁。
- (27) 前掲。尚樹啓太郎、二五九頁。
- (28) 前掲。尚樹啓太郎、六三九—六四七頁。
- (29) 根津由喜夫『ビザンツ 幻影の世界帝国』講談社、一九九九、九七頁。ブローデル・F(岩崎力訳)『都市ヴェネツィア—歴史紀行』岩波書店、一九九〇、六五—六六頁。
- (30) 前掲。一六四頁。一七三頁。
- (31) 前掲。一〇二—一〇三頁。
- (32) 森安達也『ビザンツとロシア・東欧』講談社、一九八五、六〇頁。
- (33) 前掲。五六頁。
- (34) ピグレフスカヤ『ビザンツ帝国の都市と農村』創文社、一九六八、五頁。
- (35) シャルル・イグネ(宮島直樹訳)『ドイツ植民と東欧世界の形成』彩流社、一九九七、三六〇—四二二頁。
- (36) 前掲(8)。オットー・ブルンナー、三六一—三六二頁。

- (37) ヴェルナツキー・G (松木栄三訳) 『東西ロシアの黎明』風行社、一九九九、二二二―二三四頁。
- (38) 細川滋 『東欧世界の成立』山川出版社、一九九七、四〇頁。
- (39) 高橋理 『ハンザ同盟』教育社、一九八〇、六三頁。
- (40) 前掲。一六四頁。
- (41) 前掲。九五頁。
- (42) ポスタン・M (宮島直樹訳) 『第四章 東欧と西欧の経済関係』(バラクロウ・G編『新しいヨーロッパ像の試み』刀水書房、一九七九) 一四七―一九〇頁。
- (43) ベレンド・I・T、ラーンキ・G (南塚信吾監訳) 『東欧経済史』中央大学出版会、一九七八、七頁。
- (44) ベレンド・I・T、ラーンキ・G (柴宣弘、柴理子、今井淳子、今村芳訳) 『ヨーロッパ周辺の近代一七八〇―一九一四』刀水書房、一九九一、三一五―三三頁。
- (45) 富岡庄一 『ロシア経済史研究』有斐閣、一九九八、三一〇―三一六頁。
- (46) 廣岡正久 『ロシアを読み解く』講談社現代新書、一九九五、一五―一六頁。
- (47) 前掲。五〇頁。
- (48) 前掲。ヴェルナツキー・G 『東西ロシアの黎明』風行社、一九九九、六一―七頁。
- (49) 清水睦夫 『ビザンティオンの光芒』晃洋書房、一九九二、二二四―二二七頁。
- (50) 前掲書。ヴェルナツキー・G、一九九九、四七頁。
- (51) 黒川知文 『ロシア・キリスト教史』教文館、一九九九、六七―六八頁。
- (52) 土肥恒之 『ビョートル大帝とその時代 サンクト・ペテルブルク誕生』中公新書、一九九二、二三八―二三九頁。
- (53) 前掲書。黒川知文、一一八頁。
- (54) 前掲書。黒川知文、一三一頁。
- (55) 前掲書。黒川知文、一三二頁。
- (56) 前掲書。黒川知文、一七五頁。
- (57) 前掲書。黒川知文、一七六頁。



- (58) 川端香男里『ロシア』講談社学術文庫、一九九八、八八一—二頁。
- (59) 前掲書。川端香男里、一〇四頁。
- (60) 前掲書。土肥恒之、一九九二、五二—五九頁。
- (61) 前掲書。土肥恒之、一九九二、一〇四—一二五頁。
- (62) 前掲書。土肥恒之、一九九二、一三八—三九頁。
- (63) 前掲書。土肥恒之、一九九二、一四二—一四三頁。
- (64) 前掲書。土肥恒之、一九九二、一四二頁。
- (65) 前掲書。土肥恒之、一九九二、一四四—一四五頁。
- (66) 前掲書。土肥恒之、一九九二、一九二—一九九頁。
- (67) 前掲書。土肥恒之、一九九二、二〇四—二〇七頁。
- (68) 鈴木健夫「近代ロシアへのドイツ人入植の開始——ドイツ諸地域からヴォルガ流域へ」(鈴木健夫編『ヨーロッパ』の歴史  
的再検討)早稲田大学出版部、二〇〇〇)、一二五—一六七頁。
- (69) 佐口透『ユーラシア文化史選書 ロシアとアジア草原』吉川弘文館、一九六六、三一—三三頁。
- (70) 前掲書。佐口透、一九六六、三二頁。
- (71) 佐々木史郎『北方からきた交易民』NHKブックス 日本放送出版協会、一九五頁。
- (72) 前掲書。佐々木史郎、二四三—二四四頁。
- (73) 加藤九祚『シベリアの歴史』紀伊国屋書店、一九九四、七一頁。
- (74) 司馬遼太郎『ロシアについて』文春文庫、一九八九、五七—五八頁。
- (75) 原暉之『ウラジオストク物語』三省堂、一九九八、六三頁。
- (76) 藤本和貴夫・松原広志編『ロシア近現代史』ミネルヴァ書房、一九九九、七二—七三頁。
- (77) 前掲書。ベレンド・I・T、ラーンキ・G(柴宣弘、柴理子、今井淳子、今村芳訳)『ヨーロッパ周辺の近代一七八〇—  
九一四』刀水書房、一九九一、八九頁。
- (78) 前掲書。藤本和貴夫・松原広志編、一九九九、八九—九〇頁。

- (79) 前掲書。藤本和貴夫・松原広志編、一九九九、九〇頁。
- (80) 前掲書。藤本和貴夫・松原広志編、一九九九、一一四―一一五頁。
- (81) Brower D. R. *The Russian City between Tradition and Modernity, 1850-1900*, University of California Press, 1990, 四七頁。
- (82) 前掲書。Brower D. R. 七〇頁。
- (83) 前掲書。Brower D. R. 七六―七七頁。
- (84) 前掲書。Brower D. R. 七九―八〇頁。
- (85) 前掲書。Brower D. R. 八一頁。
- (86) 前掲書。Brower D. R. 八七頁。
- (87) 前掲書。Brower D. R. 二〇六頁。
- (88) 前掲書。Brower D. R. 二〇七頁。
- (89) 前掲書。Brower D. R. 二一〇頁。
- (90) ハウマン・H (平田達治・荒島浩雅訳) 『東方ユダヤ人の歴史』鳥影社、一九九九、一〇九―一二五頁。
- (91) 前掲書。Brower D. R. 二〇八頁。
- (92) 前掲書。藤本和貴夫・松原広志編、八二―八三頁。
- (93) 松坂公孝『第九章 ゼムストヴォの最後——ロシアにおける市民的民主主義の可能性』(和田春樹、家田修、松坂公孝編『スラブの歴史』弘文堂、一九九五) 二四三―二六九頁。
- (94) 前掲書。藤本和貴夫・松原広志編、一八七―二〇〇頁。
- (95) Odom W. E., *The Collapse of the Soviet Military*, Yale University Press, 1998, 三八九頁。
- (96) カザ・G (岡田良之助訳) 『大衆動員社会』柏書房、一九九九、三〇頁。
- (97) Solnick S. L., *Stealing the State — Control and Collapse in Soviet Institutions*, Harvard University Press, 1998, 第四章及び第六章参照。
- (98) 前掲書。カザ・G, 三七頁。
- (99) 前掲書。カザ・G, 三八頁。

- (100) 前掲書。カザ・G、七一―八八頁。
- (101) 早川和男、第四章「都市と体制」(岩波講座現代都市政策Ⅰ都市政策の基礎一九七二)二三九―二六二頁。
- (102) 前掲書。木村浩『世界の都市の物語 モスクワ』文芸春秋、一九九二、一六三―一九八頁。
- (103) 前掲書。早川和男、二四二頁。
- (104) 下斗米伸夫『スターリンと都市モスクワ 一九三一―三四年』岩波書店、一九九四、一五一―三二頁。
- (105) 前掲書。下斗米伸夫、四六一―四七頁。
- (106) 前掲書。下斗米伸夫、四八頁。
- (107) 前掲書。下斗米伸夫、四九頁。
- (108) 前掲書。下斗米伸夫、一五四頁。
- (109) 前掲書。下斗米伸夫、一六五―一六八頁。
- (110) 前掲書。下斗米伸夫、一七九頁。
- (111) 前掲書。下斗米伸夫、二四四頁。
- (112) Cook L. J., *The Soviet Social Contract and Why It Failed — Welfare Policy and Workers' Politics From Brezhnev to Yeltsin*, Harvard University Press, 1993, 一八二頁。
- (113) Baler J. H., *Russia and the Post-Soviet Scene — A Geographical Perspective*, Arnold, 1996, 一三九頁。
- (114) 前掲書。Baler J. H., 一三九頁。
- (115) 前掲書。Baler J. H., 一四〇―一四二頁。
- (116) 前掲書。Baler J. H., 一四六頁。
- (117) 前掲書。Baler J. H., 一四七頁。
- (118) 前掲書。小川和男『ロシア経済事情』岩波書店、一九九八、一五一―一六頁。
- (119) 前掲書。小川和男、一八六―一八七頁。
- (120) 前掲書。小川和男、三四頁。
- (121) 前掲書。小川和男、八八頁。

- (122) 前掲書。小川和男、一八四頁。
- (123) 藤田弘夫『都市の論理——権力はなぜ都市を必要とするか』中公新書、一九九三、一三五頁。
- (124) Clarke S. & Kabalina V. "The New Private Sector in the Russian Labour Market," *Europe-Asia Studies* Vol. 52, No. 1, 2000, 七—三二頁。
- (125) ウェーバー・M (黒正巖・青山秀夫訳) 『一般社会経済史要論 下巻』岩波書店、一九五五、一七七一—一八五頁。
- (126) メドヴェージェフ・R 『ロシアは資本主義になれるか?』現代思想社、一九九九、三三三頁。
- (127) 前掲書。メドヴェージェフ・R、一九九九、六二頁。
- (128) 尾上八郎『ロシアにおけるアダム・スミス』宮本憲一・大江志乃夫・永井義雄編『市民社会の思想』御茶の水書房、一九八三、一九三頁。
- (129) 前掲書。尾上八郎、一九五頁。
- (130) 前掲書。メドヴェージェフ・R、一九九九、六二—六三頁。
- (131) 前掲書。メドヴェージェフ・R、一九九九、第二章参照。
- (132) ツェリツシェフ・I 『ロシア経済に何が起こっているか』日本経済新聞社、一九九五、二二九—二三五頁。
- (133) 高橋保行『ギリシャ正教』講談社学術文庫、一九八〇、一九九—二〇二頁、二四六—二四七頁参照。
- (134) 前掲書。高橋保行『ギリシャ正教』、一九九—二〇〇頁。ヴェーバー・M (大塚久雄訳) 『プロテスタントイザムの倫理と資本主義の精神』、岩波文庫、一九八九、二八六—二八七頁参照。
- (135) 前掲書。ヴェーバー・M 『プロテスタントイザムの倫理と資本主義の精神』、岩波文庫、一九八九、二九三頁。高橋保行『ギリシャ正教』、二四七頁参照。
- (136) 前掲書。ヴェーバー・M 『プロテスタントイザムの倫理と資本主義の精神』、岩波文庫、一九八九、三六六頁。
- (137) レーニン『ロシアにおける資本主義の発展 下』岩波書店、一九八一、一八一頁。
- (138) ツェリツシェフ・I 『ロシア経済に何が起こっているか』日本経済新聞社、一九九五、二二九—二三五頁。
- (139) 廣岡正久『ロシア正教会の現在——その復活とジレンマ』NIRA政策研究 Vol. 13 No. 4, 2000 参照。

## 参考文献

### 〔邦語文献〕

- 家田修「第七章 東欧社会経済史」(和田春樹、家田修、松坂公孝編『スラブの歴史』弘文堂、一九九五)  
井上浩一、栗生沢猛夫編『世界の歴史II ビザンツとスラブ』山川出版社、一九九八  
植田樹『最後のロシア皇帝』筑摩選書、一九九八  
ヴェーバー・M(肥前栄一、鈴木健夫、小島修一、佐藤芳行訳)『ロシア革命論I&II』、名古屋大学出版会、一九九八  
ヴェーバー・M(大塚久雄訳)『プロテスタントイイズムの倫理と資本主義の精神』、岩波文庫、一九八九  
ヴェーバー・M(黒正巖・青山秀夫訳)『一般社会経済史要論 下巻』岩波書店、一九五五  
ヴェルナツキー・G(松木栄三訳)『東西ロシアの黎明』風行社、一九九九  
尾上八郎「ロシアにおけるアダム・スミス」宮本憲一・大江志乃夫・永井義雄編『市民社会の思想』御茶の水書房、一九八三  
小川和男『ロシア経済事情』岩波新書、一九九八  
小川和男『東欧再生への模索』岩波新書、一九九五  
カーエン・C(渡辺金一訳)『比較社会経済史』創文社、一九八八  
カザ・G(岡田良之助訳)『大衆動員社会』柏書房、一九九四  
加藤九祚『シベリアの歴史』紀伊国屋書店、一九九四  
川端香男里『ロシア』講談社学術文庫、一九九八  
木村浩『世界の都市の物語 モスクワ』文芸春秋、一九九二

- ギリヤローフスキー・V・A (中田甫訳) 『世紀末のモスクワ モスクワとモスクワ人』 群像社、一九八五
- 黒川知文 『ロシア・キリスト教史』 教文館、一九九九
- 坂本勉 『トルコ民族主義』 講談社現代新書、一九九六
- 佐口透 『ユーラシア文化史選書 ロシアとアジア草原』 吉川弘文館、一九六六
- 佐々木史郎 『北方からきた交易民 NHKブックス 日本放送出版協会』
- サーヘニー・K (松井秀和訳) 『ロシアのオリエンタリズム——民族迫害の思想と歴史』 柏書房、二〇〇〇
- 尚樹啓太郎 『ビザンツ帝国史』 東海大学出版会、一九九九
- 清水陸夫 『ビザンティオンの光芒』 晃洋書房、一九九二
- 司馬遼太郎 『ロシアについて』 文春文庫、一九八九
- 下斗米伸夫 『スターリンと都市モスクワ 一九三二—三四年』 岩波書店、一九九四
- シャルル・イグネ (宮島直樹訳) 『ドイツ植民と東欧世界の形成』 彩流社、一九九七
- 週刊ユネスコ 『世界遺産』 No. 15 トルコ・イスタンブールの歴史地区、講談社、二〇〇一
- 鈴木健夫 『近代ロシアへのドイツ人入植の開始——ドイツ諸地域からヴォルガ流域へ』 (鈴木健夫編 『「ヨーロッパ」の歴史的再検討』 早稲田大学出版部、二〇〇〇)
- 高橋理 『ハンザ同盟』 教育社歴史新書、一九八〇
- 高橋保行 『迫害下のロシア教会』 教文館、一九九六
- 高橋保行 『東方の光と影』 春秋社、一九九一
- 高橋保行 『神と悪魔——ギリシャ正教の人間観』 角川選書、一九九四
- 高橋保行 『ロシア精神の源——よみがえる「聖なるロシア」』 中公新書、一九八九
- 高橋保行 『ギリシャ正教』 講談社学術文庫、一九八〇
- 田中雄三編 『龍谷大学社会科学研究所叢書ⅩⅢ 脱社会主義経済の現状』 リベルタ出版、一九九四
- 富岡庄一 『ロシア経済史研究 十九世紀後半—二十世紀初頭』 有斐閣、一九九八
- チャノン・J、ハドソン・R、外川継夫監修 『地図で読む世界の歴史 ロシア』 河出書房、一九九九

- ツェリツシェフ・I 『ロシア經濟に何が起こっているか』 日本經濟新聞社、一九九五
- 土肥恒之 『ビョートル大帝とその時代 サンクト・ペテルブルク誕生』 中公新書、一九九二
- 中村逸郎 『ロシア市民』 岩波新書、一九九九
- 中村喜和 『聖なるロシアを求めて——旧教徒のユートピア伝説を求めて』 平凡社、一九九〇
- ニコリスキー・N・M (宮本延治訳) 『ロシア教会史』 恒文社、一九九〇
- 根津由喜夫 『ビザンツ 幻影の世界帝国』 講談社、一九九〇
- ハウマン・H (平田達治・荒島浩雅訳) 『東方ユダヤ人の歴史』 鳥影社、一九九九
- 橋口倫介 『中世のコンスタンティノープル』 講談社学術文庫、一九九五
- 原暉之 『ウラジオストク物語』 三省堂、一九九八
- バラクロウ・G (木村尚三郎解説、宮島直機訳) 『新しいヨーロッパ像の試み——中世における東欧と西欧』 刀水書房、一九七九
- 早川和男 第四章 『都市と体制』 (石波講座 現代都市政策Ⅰ都市政策の基礎 一九七二)、岩波書店
- 藤田弘夫 『都市の論理——権力はなぜ都市を必要とするか』 中公新書、一九九三
- 藤本和貴夫、松原広志編 『ロシア近現代史——ビョートル大帝から現代まで』 ミネルヴァ書房、一九九九
- ブローデル・F (岩崎力訳) 『都市ヴェネツィア——歴史紀行』 岩波書店、一九九〇
- 廣岡正久 『ロシア正教会の現在——その復活とジレンマ』 NIRA政策研究 Vol.13 No.4, 2000
- 廣岡正久 『ロシアを読み解く』 講談社現代新書、一九九五
- ヒッバート・C (渡辺真弓訳) 『歴史の都の物語 (下)』 原書房、一九九二
- ピグレフスカヤ (渡辺金一訳) 『ビザンツ帝国の都市と農村』 創文社、一九六八
- 藤田弘夫 『都市の論理』 中公新書、一九九三
- ブラウニング・R (金原保夫訳) 『ビザンツ帝国とブルガリア』 東海大学出版会、一九九五
- ブレンド・I・T、ラーンキ・G (柴宣弘、柴理子、今井淳子、今村芳訳) 『ヨーロッパ周辺の近代一七八〇—一九一四』 刀水書房、一九九一
- ブレンド・I・T、ラーンキ・G (南塚信吾監訳) 『東欧經濟史』 中央大学出版会、一九七八

細川滋『東欧世界の成立』山川出版社、一九九七  
的場徳造『ソ連邦の都市と農村』御茶の水書房、一九八〇

松坂公孝『第九章 ゼムストヴォの最後——ロシアにおける市民的民主主義の可能性』(和田春樹、家田修、松坂公孝編『スラブの歴史』弘文堂、一九九五)

マクニール・W・H『ヴェネツィア——東西ヨーロッパのかなめ、一〇八一—一七九七』岩波現代選書、一九七九

増田四郎『西洋中世世界の成立』講談社学術文庫、一九九六

陸口潤編『ロシア市場経済の迷走』講談社新書、一九九三

メドヴェージェフ・R『ロシアは資本主義になれるか?』現代思想社、一九九三

森本忠夫『さまよえるロシア 破局の経済改革の下で』日本放送出版教会、一九九三

森安達也『東方キリスト教の世界』山川出版社、一九九一

森安達也『ビジュアル版 世界の歴史9 ビザンツとロシア・東欧』講談社、一九八五

ルイ・ブイエ(上智大学中性思想研究所翻訳・監修)『キリスト教神秘思想史1 教父と東方の靈性』平凡社、一九九六

ルドン・J・P『第三章 十八世紀のロシア』(和田春樹、家田修、松坂公孝編『スラブの歴史』弘文堂、一九九五)

渡辺金一『中世ローマ帝国——世界史を見直す』岩波新書、一九八〇

渡辺金一『コンスタンティノープル千年——革命劇場』岩波新書、一九八五

渡辺金一『ビザンツ社会経済史研究』岩波書店、一九六八

〔英語・ロシア語文献〕

Alex E. Fernandez Jilberto and Andre Mommen, *Regionalization and Globalization in the Modern World Economy*, Routledge, 1998  
Andruz G., Harole M., and Szelenyi I, eds., *Cities After Socialism — Urban And Regional Conflict in Post-socialist Societies*,



- Blackwell, 1996
- Bater J. H., *Russia and the Post-Soviet Scene — A Geographical Perspective*, Arnold, 1996
- Brower D. R. *The Russian City between Tradition and Modernity, 1850-1900*, University of California Press, 1990
- Chandler A., *Institutions of Isolation — Border Controls in the Soviet Union and Its Successor States, 1917-1993*, McGill-Queen's University Press, 1998
- Clarke S. & Kabalina V. "The New Private Sector in the Russian Labour Market", *Europe-Asia Studies* Vol.52, No.1, 2000, pp.7-32
- Cook L. J., *The Soviet Social Contract and Why It Failed — Welfare Policy and Workers' Politics From Brezhnev to Yeltsin*, Harvard University Press, 1993
- Dmitrieva O., *Regional Development — The USSR and After. Changing Eastern Europe Series 1*, UCL Press, 1996
- Gaddy C. G., *The Price of the Past — Russia's Struggle with the Legacy of a Militarized Economy*, Brookings Institution Press, 1996
- Hardy S., Hart M., Alberchts L., and Katos A, *An Enlarged Europe — Regions in Competition ?, Regional Policy and Development Series 6*, Jessica Kingley Publishers, 1995
- Isachenko V. G. ed., *Zadachie Sankt-Peterburga XIX-Nachalo XX Veka*, Lenizdat, 1997
- Khisanutdinov A. A., *Vladivostok — Etyudy k Istorii Starogo Goroda*, Izdatel'stvo Dal'nevostochnogo Universiteta, 1992
- Kornai J., *The Socialist System — The Political Economy of Communism*, Oxford University Press, 1992
- King R. ed., *The New Geography of European Migrations*, Belhaven Press, 1993
- Krasnov Yu. K. *Russkie — Sotsialnyi Portret*, Izdatel'stvo Dal'nevostochnogo Universiteta, 1989
- LeDonne J. P., *The Russian Empire and the World, 1700-1917 — The Geopolitics of Expansion and Containment*, Oxford University Press, 1997
- Markov V., *Zaransvui, Vladivostok !*, Dal'nevostochnoe Knizhnoe Izdatel'stvo, 1988
- Odom W. E., *The Collapse of the Soviet Military*, Yale University Press, 1998
- Pickles J. and Smith A., eds., *Theorising Transition — The Political Economy of Post-Communist Transformations*, Routledge, 1998
- Polikropov V. C. *Istoriya Nravov Rossii*, Izdatel'stvo Feniks, 1995

- Rivkin B. I., *Staryi Vladivostok*, Utro Rossii, 1992
- Schofield C. H. ed., *World Boundaries Volume I Global Boundaries*, Routledge, 1994
- Sohnick S. I., *Stealing the State — Control and Collapse in Soviet Institutions*, Harvard University Press, 1998
- Shaw Denis J. B., *Russia in the Modern World*, Blackwell, 1999
- Smith J., *The Bolsheviks and the National Question 1917-23*, Macmillan Press, 1999